

外国籍児童生徒サポート事例集

多文化な子どもたちの 未来をひらくために

Case Studies of Assistance for non-Japanese Schoolchildren

外国籍学生支援事例集

외국국적 아동・청소년 서포트 사례집



MIA 公益財団法人
宮城県国際化協会
MIYAGI INTERNATIONAL ASSOCIATION

協力：外国人の子ども・サポートの会

「外国籍児童生徒サポート事例集～多文化な子どもたちの未来をひらくために～」

はじめに

県内に暮らす外国人の数が増加を続けるなか、多様な文化背景を持った子どもたちが学校で学ぶ姿も珍しくなくなってきました。

そうした子どもたちは、言葉や習慣の違いから、勉強についていけなかったり、孤立したりという困難な状況に陥りがちです。

そのような状況のなかでも、これまで、学校の先生の指導をはじめ、教育委員会や各種団体の支援を受けつつ努力を重ね、さまざまなハードルを乗り越えて、高校進学そしてその次へと歩みを進めた子どもたちが大勢います。

この本は、今では社会人として、または「後輩」をサポートする立場として、周囲を支える側となっている「先輩」が、どのような支援制度を活用して、それぞれの道を歩んできたかをまとめた事例集です。

外国人の子どもと保護者、また受け入れる学校の先生たちが、その子の未来をひらくために、どのようにステップを積み重ねていけばよいのかを検討する際の資料として、是非ご活用ください。

2019年3月

公益財団法人宮城県国際化協会（MIA）



この事例集について



この事例集は、宮城に暮らす10人の外国籍児童生徒の事例を取り上げ、それぞれが学校内外でどのような支援制度を活用し、自分の目標を達成していったかを紹介しています。各事例のなかに出てくるキーワード（番号を振って太字にしています）については、全ての事例のあとでまとめて説明しています。

また、各事例のあとに「外国人の子ども・サポートの会」代表の田所希衣子さんによる、それぞれのサポート事例を振り返ってのコメントを掲載しています。田所さんのコメントのなかにも、未来をひらくためのヒントがたくさん見つかるでしょう。

巻末では、外国籍児童生徒の支援を行っている団体を紹介しています。

■日本語・・・1ページ

■英語・・・17ページ

■中国語・・・35ページ

■韓国語・・・49ページ

事例1 O.S.さん(中国出身)



O.S.さんは、来日後、本来の年齢の学年より1学年下げて、中学校2年生に編入しました(※1)。中学校に通いつつ、M I A日本語夜間講座(※2)に通って、日本語の勉強を続けました。また、外国人の子ども・サポートの会(※3)のサポーターと一緒に教科の勉強もしました。それから、土曜日には、さっと日本語クラブ(※4)にも通いました。

進学については、保護者が学校や教育委員会と相談して、県立高校(※5)を受験することにしました。配慮申請(※6)をして、社会と理科と国語は別室で試験時間を延長してもらい、英語と数学は別室で試験を受けました。また、作文の試験と面接も受けました。

高校に入学してからも、勉強についていくのは最初は大変でしたが、わからないところは休み時間や放課後などに積極的に先生に質問するようにしました。当時のことを振り返り、Sさんは「生徒がわからないところを先生が教えるのは当たり前のことだから、遠慮せずにどんどん質問していた」と振り返ります。なかには、教科書にふりがなをふってくれる先生もいて、とても助かったそうです。また、外国人の子ども・サポートの会のサポーターとの勉強も続けました。

高校では良い成績を収めて、推薦入試(※7)を経て宮城大学の事業構想学部に進学。建築の勉強をしました。大学生になってからは、同じような立場の外国出身の後輩たちのサポートにも力を入れました。

大学を卒業した後は、建設会社に就職し、社会人として忙しい毎日を過ごしています。

O.S.さんのサポートを振り返って



O.S.さんは、ただ努力するだけでは結果に結びつかないこと、目標を達成するために何をすればよいかを考えて、強い意志をもって努力することを知っていました。日本の大学に留学経験のある叔母さんからのアドバイスもありました。また、当時は中学校の先生方に「配慮申請」の存在が知られていなかったため、お父さんが宮城県教育委員会に相談し、その内容を中学校の先生に伝えました。保護者の熱心な後押しもO.S.さんの力になりました。

大学に入学してからは、大学卒業後に二級建築士の試験を受ける、就職は一級建築士の勉強が続けられるところを選ぶ、という具体的な将来図をもって勉強をしていました。今も仕事をしながら夢の実現のために勉強を続けています。

事例2 K.T.さん(韓国出身)



K.T.さんは、韓国で中学を卒業してから16歳で来日しました。仙台市内の民間の**日本語学校**(※8)、**せんだい日本語講座**(※9)、**MIA 日本語講座**(※2)に通って日本語を集中的に学びました。また、**外国人の子ども・サポートの会**(※3)のサポーターと一緒に数学、英語の勉強もしました。県の高校教育課に、**中学卒業後に来日した生徒が公立高校を受験するための手続きなどについて確認しながら**(※10)、志望校を決めました。

志望校には、**受験の相談のために何度か訪問しました**(※11)。二回目の訪問のときは、最初の訪問時に比べて日本語が上達していたので、その間の本人の努力と成長を先生方に見てもらうことができました。

10月に来日して、翌年の3月に受験。**配慮申請**(※6)をして、入試のときは数学、英語(数学、英語の試験時間はそれぞれ10分ずつ延長)、作文の試験と面接を受け、無事に志望校に合格。高校に進学してからも外国人の子ども・サポートの会のサポートを受け、主に教科の勉強をしました。

K.T.さんは、大学に進学するのに、通常とは異なる方法を選択しました。日本でそのまま高校を卒業するのではなく、在学中に韓国にいったん戻り、韓国での高校卒業資格を得るための試験を受けて合格し、その後**日本留学試験**(※12)を受けて、留学生として宮城大学に入学したのです。

大学在学中に2度のアメリカ留学も経験し、英語力も身に付けた K.T.さんは、この春、就職予定となっています。

K.T.さんのサポートを振り返って



母国の中学校を卒業後に来日した生徒が「配慮申請」をする場合、自分の将来の希望、高校でどんなことをしたいか、入学後には授業の学習と日本語の勉強をしっかりと続けることを高校の先生方に伝え、3年間の高校生活を送ることができるとわかってもらうことが大切です。

高校入学後 K.T.さんは韓国と日本の学校生活や友達同士の付き合い方の違いに戸惑った時期もありましたが、次第に慣れていきました。K.T.さんが、来日して間もない後輩たちに話したことがあります。「友だちを見つけるためには、周りの人をよく観察してください。『この人はいいい人だな。』と思ったら、その人の真似をするといいです。ただ忘れてはいけないことは、自分らしくないことは絶対にしないことです。」

事例3 S.S.さん(中国出身)



S.S.さんは中学校卒業に来日し、**MIA 日本語講座**(※2)で日本語を学んだあと、**通信制の高校**(※13)に進学しました。通信制の高校は、普段は学校へのレポート提出を中心にして学習を進め、スクーリング、試験を受けて単位を取得する必要があります。学校に提出するレポートの作成を、**外国人の子ども・サポートの会**(※3)のサポーターの協力を得ながら一緒に進めました。試験の問題はレポートから出るので、この作成をしっかりと進めることが確実な単位取得につながります。わからない箇所は、スクーリングの時に高校の先生が丁寧に指導してくれました。

S.S.さんは自動車の整備に興味があったので、高校卒業後は、自動車整備を学ぶ**専門学校**(※14)に進みました。現在は自動車メーカー系列の整備工場で働いています。

S.S.さんのサポートを振り返って



S.S.さんは黒竜江省出身で、地元には日本の T 社の自動車製造工場がありました。高校卒業後の進路は、自動車整備の専門学校で技術を身につけて T 社の車を整備したいという希望を持っていました。それを聞いて、お父さんは専門学校の入試手続きを手伝ってくれました。高校の先生も勉強を教えてくれました。

高校の先生方は、生徒が進路の希望を決めると、実現のために勉強の面でも進路指導の面でもサポートをしてくれます。逆に、生徒が何をしたいか決められないと、進路指導は進みません。

事例4 S.H.さん(日本／フィリピン出身)



S.H.さんは日本生まれです。約8年間で日本で過ごした後、家族でフィリピンに移りました。小学校6年間、ハイスクール4年間という、当時のフィリピンの通常の教育を終えてから、16歳で日本に戻りました。フィリピンでは大学に進学できる年齢でしたが、日本の制度上では中等教育の年数が2年足りておらず、大学に進むことはできませんでした。フィリピン滞在中も日本語の勉強は少しずつ続けていましたが、だいぶ忘れてしまいました。

父親が「日本語を母語としない子どもと親のための進路ガイダンス」(※15)に参加したことがきっかけとなり、**外国人の子ども・サポートの会**(※3)のサポートを受けることに。数学、英語、作文、漢字などの勉強を頑張りました。また、**せんだい日本語講座**(※9)でも勉強しました。

はじめは**専門学校**(※14)か、**高等学校卒業程度認定試験**(※16)を受験してから大学へ進学すること、または就職することを考えていましたが、実際に高校を訪問し、授業や部活の様子を見学しているうちに、高校進学を考えるようになりました。

最初に受けた自宅近くにある県立高校は不合格になったため、**二次募集**(※17)をしていた別の県立高校を受験し、合格。どちらの入試でも**配慮申請**(※6)をして、英語、数学、作文、面接の試験を受けました。

その高校は国際理解教育に熱心に取り組んでいて、異文化や英語に興味がある生徒が大勢いました。そのことはS.H.さんにとって大きな助けとなりましたし、学校の授業や部活動を通して、S.H.さん自身もグローバルな視点で物事を考えるようになりました。勉強にも引き続き熱心に取り組んだおかげで、成績も順調に伸び、**推薦入試**(※7)で宮城大学に進学しました。

大学に入ってから、同じような立場のフィリピンの子供達をサポートする活動や大学のサークル活動にも積極的に参加しました。この春から社会人になる予定です。

S.H.さんのサポートを振り返って



S.H.さんは、日本で大学進学を考えていたのにそれができないことがわかり、人生の岐路に立っていました。フィリピンのハイスクールを卒業した自分が、また高校の入学試験を受けることは大きな決断だったと思います。しかし、その決断の後、新たな高校生活で先生や友達と出会い、多くを学び、考えていきます。そして、自分が二つの国に育てられ、二つの国のことを身につけたことの価値に気づきました。日本で学問と仕事の技術を身につける、そして、それを大好きなフィリピンのために活かすことが、将来の計画の一つになりました。

来日によって、生活が一変し、思いもかけない岐路に立つことがあります。選んだ道の先にどんな未来があるか考えると不安です。高校生になった先輩たちを見ていると、今までと全く違う環境と新しい人間関係の中で、辛い思い、寂しい思い、納得のいかない思いと葛藤を経て、少しずつ‘強く生きる力’を自分で育ててきました。いろいろな人の話を聞いて情報を集める。選択肢を一つだけでなくいくつか見つける。自分で考え、自分で行動を選ぶ。自分で選ぶことがとても大切なようです。

事例5 C.M.さん(中国出身)



C.M.さんは、中学卒業後に来日しました。MIA 日本語講座(※2)で日本語を学びながら、外国人の子ども・サポートの会(※3)のサポートを受けて、教科の勉強もしました。

C.M.さんは英語が得意だったので、英語教育に力を入れている高校への進学を考えました。複数の学校を見学した結果、学校の雰囲気が自分に合っていたことから、国際コースのある県立高校を目指すことに。その高校には複数回見学に行き、先生方にその間の日本語能力の伸び具合を見てもらいました。

受験の際には**配慮申請**(※6)をして、英語、数学、作文、面接の試験を受けて、無事合格。持ち前の明るい性格も幸いし、充実した高校生活を過ごしました。学校の先生たちは、「C.M.さんが来てから学校の雰囲気が変わった」とまで言っています。バスケットボール部に所属し、対外試合でも奮闘しました。

勉強にも力も入れ、外国人の子ども・サポートの会のサポーターとの勉強を続け、大学進学を目指しました。

A0 入試(※18)で、東北学院大学教養学部に進学。在学中は勉強やサークル活動に取り組むだけでなく、学外で行われたシンポジウムなどにも積極的に参加して発言するなど、自分の考えを積極的に発信することにも努めました。4月からは社会人になる予定です。

C.M.さんのサポートを振り返って



C.M.さんは、『考えることが好きです。』と来日当初言っていました。それと同じくらい、周りの人といっしょに新しいこと、楽しいことをするのが好きなのではないかと思います。高校生るとき、こんなことを話していました。『空気を読む』のがいいと言うけれど、自分は『空気をつくる』ほうがいい。』クラスの話合いのとき、「自分が提案すると、女子たちが『却下。』って言う。また別の提案をすると、また『却下。』って言う。」と不満そうに言っていたましたが、にぎやかな雰囲気がよくわかりました。

自分に自信を持っていること。好きなことを好きだと言うこと。得意なことがあること。そういう自分の中の灯台の光を輝かせましょう。振り返って見ると、後ろに自分が歩いてきた足跡がしっかりとついています。

事例6 O.Y.さん(中国出身)



O.Y.さんは、中国で通っていた高校を途中で辞めて来日し、私立高校に入学しました。当時は日本語はあまり話せませんでしたが、学習意欲がとても高く、高校の3年間、欠席がありませんでした。授業の予習・復習を欠かさなかったほか、同じ中国出身の先輩のアドバイスを受け、授業でわからなかった箇所を積極的に先生に質問することも心がけました。定期テストでは、国語、歴史には苦勞しましたが、数学、英語、化学、生物などでは、毎回良い成績を収めることが出来ました。

学校以外でもいろいろな方法で学習を進めました。まず、**MIA 日本語夜間講座**(※2)に通いました。3期計60回の授業のうち、休んだのは大学の**オープンキャンパス**(※19)の日程と重なった1日だけです。また、**外国人の子ども・サポートの会**(※3)のサポーターと教科の勉強をしたほか、**MIA 日本語サポーター**(※20)や、オープンスペースで自習中に知り合った日本人男性とも日本語の勉強をしました。O.Y.さんは当時のことを振り返って、「日本語の勉強と教科の勉強が同時に始まったので大変だった」と言います。

理科、特に生命科学の分野に関心が高く、顕微鏡や解剖用のキットを買い揃えて自分で釣った魚を解剖して観察することにも熱中しました。卒業後の進路として考えたのは、東北薬科大学(現：東北医科薬科大学)です。進学に向けて高校の先生方が熱心に学習サポートをしてくれたほか、同大学のオープンキャンパスに複数回行ったり、教員に相談に行き講義を見学したりなど、積極的に情報収集に努め、生命薬科学科に**推薦入試**(※7)で進学を果たしました。入学前から自主学習が求められるなど、大学に入ってから更に勉強に費やす時間が増えましたが、自分の興味のある分野のことなので、とても充実しているとO.Y.さんは言います。毎日、ほぼ12時間以上研究室で実験をしています。将来研究者になることを目指して大学院に進学するつもりです。

O.Y.さんのサポートを振り返って



O.Y.さんは、日本に来る前から生命科学に関心を持っていました。『命』を意識していたのだと思います。ほかの人をいつも大切に、声を荒げたり、争ったりすることはありません。たぶん、周りの高校の同級生より自分が年上だという思いもあったと思いますが、初心を貫くために粘り強く勉強を続けました。高校の先生方も応援をしてくれました。

生命薬科学科に進学するためには、高校の化学の教科書の日本語の説明と公式の意味を理解して、問題を解く力が必要です。O.Y.さんは、他の多くの生徒と同様に、日本に来てから日本語を勉強したので、高校3年間に大変な努力をしていました。そう簡単ではなかったはずですが。

O.Y.さんの勉強を見ていて、思い出すことがあります。後輩の生徒や保護者に、日本語をどうやって勉強したか話す機会がありました。そのとき1冊のノートを開いて

みんなに見せてくれました。日本語を勉強しながら、文法を整理したノートでした。高校の授業についても、学んだことをていねいに整理したノートをつくっていました。大学生になってからも、実験のノートを見せてくれました。

O.Y.さんにとって、ノートの整理が学習を助けていました。多分、自分の学習を助ける方法は、一人一人違うと思います。勉強は魔法のようにできるものではないですね。自分の方法を見つけて、毎日少しずつ続けてください。

事例7 U.C.さん(中国出身)



U.C.さんは 15 歳の時に来日しました。日本語学校(※8)に 1 か月間通ったあと、高校進学への準備のことを考え、**本来の年齢の学年より 1 学年下げて、中学校 2 年生に編入しました(※1)。**

学校には、中国出身の**非常勤講師(※21)**が配置されていて、授業の通訳をするなどして、サポートしてくれました。非常勤講師が都合で来られない期間は、別の中国出身者が **MIA 外国籍の子どもサポーター(※22)**として学校に来てくれました。授業についていくのには苦労しましたが、友達に恵まれ、部活動にも入って、楽しく学校生活を送りました。

外国人の子ども・サポートの会(※3)のサポートも受け、主に教科の学習をサポートと一緒にしました。

推薦入試(※23)で私立高校に入学し、運動系の部活動で全国大会に出場するなど、充実した毎日を送っています。

U.C.さんのサポートを振り返って



初めて U.C.さんに会ったのは、まだ日本語の勉強を始めたばかりのころでした。私が「好きなことは何ですか？」と聞くと、すぐに「自転車。」と答えました。いろいろ聞いてわかったことは、時間があるとき、自転車で知らないところに走って行って、それまで見たこともない景色を見ることが好きだということです。「将来の夢は何ですか？」と聞くと、「スポーツ選手。」と明快に答えました。

高校では部活「自転車競技部」に入って、3年間勉強と自転車に打ち込みました。3年生の3月には、九州で開かれる全国大会に出場するそうです。「優勝するために頑張っています。」と言っています。

高校では、教室での勉強が終わってから、放課後に部活で新しい世界と友だちを見つけることができます。それぞれの高校には、調べてみると、いろいろな部活があります。野球やサッカーなど小学校、中学ずっとやってきた人が集まる部活は、技術が高い生徒が中心になります。弓道や U.C.さんが入った自転車など中学校にない部活を選べば、みんなと同じスタートができます。

事例8 B.G.さん(モンゴル出身)



B.G.さんは、小学4年生の時に来日し、仙台市内の小学校に入学しました。その小学校には外国出身の児童が多く、専任の先生が指導する**国際教室**(※24)があったので、B.G.さんも国語、社会、理科の授業のときはそこで日本語の勉強をしました。6年生になる頃には、日本語でのやりとりに全く不自由を感じなくなっていました。

外国人の子ども・サポートの会(※3)には小学生のころからサポートを受けていました。中学校に進んでから、部活などで忙しくなったのでいったんサポートが中断しましたが、3年生になり、受験の準備が必要になったところに再びサポートを受け始めました。また、自宅近くの**塾**(※25)にも通いました。

B.G.さんは、高校受験の時には、すでに来日してからかなり年数が経っていたため、**配慮申請**(※6)をすることが出来ませんでした。が、**当時あった推薦入試の制度**(※26)で、県立高校に合格しました。高校時代には、勉強だけでなく、部活やアルバイトなど、いろいろな経験をしました。

大学入学試験は、一年目の一般入試では、惜しくも不合格となりましたが、高校を卒業してから、**日本留学試験**(※12)に合格し、一年後に留学生として宮城大学事業構想学部に入學。その学部を目指したのは、受験勉強中の飲食店でのアルバイトの経験から、企業の経営マネジメントに関心が向いたからです。大学で面接を受けた際にも、アルバイトの経験をもとに志望動機を説明しました。

大学生になってからは、外国人の子ども・サポートの会の会員や仙台観光国際協会の「留学生交流委員」として積極的に活動しています。

B.G.さんのサポートを振り返って



B.G.さんは、高校生のとき、来日したばかりの頃を振り返って、「学校で緊張してストレスを感じていた毎日、自分が家に帰ると、両親がゆったりと休ませてくれました。家で休んで次の日は元気に学校に行くことができました。」と話していました。一方、それとは別に、お母さんは、「来日した当初は子どものために何もしてあげることができなかったことが残念です。」と話していました。お母さんが申し訳ないと思っていたことを、B.G.さんは感謝していたのですね。

来日して日本語の勉強を始めてから、学校の授業が聞いてわかるようになるまで、ほとんどの生徒が1年半～2年かかっています。その間の授業の内容が抜けているので、高校受験までに勉強する必要があります。B.G.さんの話では、中学生のときに行った塾が一斉授業でなく、個別の質問に答えてくれるやり方だったので、勉強していないところを教えてもらうことができたそうです。

事例9 D.A.さん(ネパール出身)



D.A.さんは、日本の学校には小学2年生の途中から通い始めました。仙台市教育委員会から指導協力者(※27)として学校に派遣されていたネパール人留学生が学習のサポートをしてくれました。平仮名・片仮名の読み書きは比較的早くマスターしましたが、漢字がわからなかったので、先生に聞いて教科書にふりがなを振っていました。中学校に入る頃には、漢字も読めるようになりましたが、国語や数学の文章題には苦労しました。

中学校2年生のときに、**外国人の子ども・サポートの会**(※3)のサポートを受け始め、主に教科学習を中心に進めました。英単語を毎日決まった数覚える、数学は問題を毎日少しずつ解く、国語は教科書を毎日1回は声に出して読む、など、コツコツと地道に学習を進めました。高校受験のために学習を進めていると、小学校の内容できちんと学んでいない箇所があることがわかったので、改めてやり直すこともしました。

高校は、中学校の先生と相談して、県立高校を目指すことに。志望校が決まっからはいっそう勉強に熱が入り、時には夜が明ける前に起きて勉強することもありました。

その努力が実り、無事に志望校に合格。高校進学後も外国人の子ども・サポートの会のサポーターと学習を続けました。高校卒業後は、料理が得意だったので、栄養学を学べる短期大学に進学し、充実したキャンパスライフを過ごしています。

D.A.さんのサポートを振り返って



D.A.さんは、こつこつと決してあきらめずに、力をつけてきました。小学校、中学校、高校の間、ずっと努力を続けてきたと思います。今は『食物栄養学』を勉強して、病気の子もたちが必要な栄養を食事でとれることを目指しています。そして、将来はネパール料理と日本料理を両方食べられる店を開くという計画を描いています。

『食物栄養学』を学ぶことで、卒業と同時に「栄養士」「フードコーディネーター3級」「情報処理士」の資格をとることができ、目指す進路も具体的に見えてきます。

事例10 R.K.さん(中国出身)



R.K.さんは、中学2年生の時に来日しました。仙台市内の公立中学校に通い、**仙台市教育委員会から派遣された指導協力者(※27)**の支援を受けました。指導協力者は中国出身者だったので、言葉の面で大きな助けになりました。仙台市教育委員会からの派遣回数が終わった後は、同じ人が**MIA 外国籍の子どもサポーター(※22)**として学校に来ました。

また、学校から依頼された日本人ボランティアが夏休み期間中に学校に来てくれて、主に日本語と数学と一緒に勉強しました。MIA 外国籍の子どもサポーターの派遣回数が終わってからも、日本人ボランティアが学校でサポートを続け、高校受験に向けて勉強しました。**配慮申請(※6)**をして受験した県立高校は惜しくも不合格となりましたが、好きなお菓子作りの基礎などの技能を学べる私立高校に進学しました。**外国人の子ども・サポートの会(※3)**のサポーターに時折お菓子を作ってプレゼントしていました。

高校卒業後の進路として、はじめは調理を学べる**専門学校(※14)**への進学を考え、**オープンキャンパス(※19)**に行くなど、進学する学校について調べていましたが、保護者のアドバイスもあり、大学を目指すことに。得意の数学を始め、良い成績を収めていたので、**指定校推薦(※28)**で東北工業大学に見事合格しました。4月からは同大学でデザインを学ぶことになっています。

R.K.さんのサポートを振り返って



R.K.さんは、日本に来る前から『自分のカフェを開きたい。』という夢を持っていました。店のインテリアをデザインし、手作りのスイーツをつくり、パッケージも自分で考える。店に来る近所の人たちが、楽しい安らぎを感じ、いいつながりができる空間を自分の手で創造したい。中国料理人のお父さんを見て、店の経営を具体的にイメージできていたのかもしれない。

中学3年生で高校を決めるとき、第二志望の高校になりましたが、R.K.さんはお菓子づくりを学ぶことができました。そして、高校3年生で進路を決めるとき、専門学校と大学のどちらにも夢をかなえるための進路の選択肢がありました。**選択肢をいくつか見つけておくと、一つがだめでもほかの道を見つけることができます。**

キーワードの説明

※１：学年を下げての在籍

日本語能力が十分でない児童生徒が小学校・中学校に編入する場合、学校の判断や保護者の希望により、年齢相当の学年より下げて在籍させる場合があります。

※２：MIA 日本語講座

宮城県国際化協会(Miyagi International Association/MIA)が開催している日本語講座です。初級１・２、中級、漢字１・２、夜間初級１・２のクラスがあります。夜間初級１・２は、毎週火曜日の 18:30～20:30 に開催されています。

※３：外国人の子ども・サポートの会

日本語学習・教科学習の支援をしている市民団体です。放課後や週末など、学校の授業の時間外に、主に仙台市内の公的施設にあるオープンスペースで、サポーターがマンツーマンで外国籍児童生徒の学習をサポートしています。

※４：さっと日本語クラブ

青葉区中央市民センターが開設している、小・中学生向けの日本語講座です。毎週土曜日の 10:00～12:00 に開設されています。教えているのは、NPO 法人 ICAS 国際都市仙台を支える市民の会のメンバーです。

※５：県立高校

宮城県の高校には、公立高校(県や市が作った高校)と、私立高校(民間が作った高校)があります。公立のほうが私立よりも入学・通学にかかる費用が安いです。

※６：公立高校受験の際の配慮

日本語能力が十分ではない生徒が公立高校を受験する際、受験科目を減らしたり、試験時間を延長したり、という「配慮」をしてもらえる場合があります。この配慮を受けるためには、前もって中学校から高校に申請する必要があります。中学校に所属していない場合は、保護者から高校に申請することもできます。

※７：大学の推薦入試

高校在学中の学業成績や課外活動で一定以上の成果を収め、学校長から推薦を得た生徒が受けることができる試験です。出願できる条件は大学によって異なります。一般の入試より先に実施され、出願書類、論文、面接によって合格者が決定されることが多いです。国公立大学の場合は、一般入試と同様に、国公立大学共通の試験が課される場合もあります。

※8：日本語学校

日本語を母語としない人に日本語を教える民間の教育機関です。通常は、それぞれの日本語学校に入学するために「留学」の在留資格を得て来日し、卒業後に大学、大学院、専門学校への進学を目指す外国人が学びます。既に国内に住んでいる外国人を受け入れている学校もあります。

※9：せんだい日本語講座

青葉区中央市民センターと仙台観光国際協会(SenTIA)が開設している外国人向けの日本語講座で、無料で学ぶことが出来ます。教えているのは、NPO 法人 ICAS 国際都市仙台を支える市民の会のメンバーです。

※10：母国で中学を卒業した生徒が公立高校に出願する際に必要な書類

中学校に在籍している生徒は、学校を通して入学願書等の書類を提出しますが、中学校に在籍していない場合は、個別に必要な書類を提出する必要があります。手続きとしては、まず出願承認を申請し、承認された後に出願という流れになります。通常、次の書類の提出が求められます。

①出願承認のために必要な書類

- ・宮城県公立高等学校出願承認願(宮城県教育庁高校教育課ホームページからダウンロード可能)
- ・学校教育における9年の課程を修了していることを証明する書類(最終学歴の学校が発行)又は中学校卒業程度認定試験合格の認定証明書(文部科学省が発行)の写し
- ・住民票の写し(在留資格の記載のあるもの)

②出願のために必要な書類

- ・入学願書及び写真票(宮城県収入証紙等を貼付)
- ・学校教育における9年の課程を修了していることを証明する書類(最終学歴の学校が発行)又は中学校卒業程度認定試験合格の認定証明書(文部科学省が発行)の写し
- ・最終学歴の成績証明書又は中学校卒業程度認定試験調査書(文部科学省が発行)
- ・出願者一覧表(宮城県教育庁高校教育課ホームページからダウンロード可能)
- ・宮城県公立高等学校出願承認書(①の出願承認願に対して、高等学校から送付される)の写し
- ・受験票送付用封筒(長形3号、受験者氏名及び住所明記、簡易書留速達分の切手貼付)
- ・結果通知用封筒(角形2号、受験者氏名及び住所明記、簡易書留速達分の切手貼付)

※11：高校の事前訪問

特定の「オープンキャンパス」の日を設けて体験入学、説明会を行っているほか、希望すれば、オープンキャンパスの日以外でも、見学を受け入れてくれる高校が多いです。特に母国で中学を卒業して来日し、日本の学校生活を経験していない人は、積極的に進学希望の高校を訪問して、学校の雰囲気を知るとともに、入試について相談すると良いでしょう。

※12：日本留学試験

「外国人留学生」として日本の大学等に入学を希望する人を対象として、日本の大学等で必要とする日本語力と基礎学力があるかどうか評価するために行われる試験です。多くの大学がこの試験を利用していますが、受験科目は大学や学部によって異なります。

※13：通信制の高校

通信制の高校は、通常は学校に行かず、自宅で教科書や解説書を使って学習を進めます。美田園高校は、県内唯一の公立の通信制高校です。レポートの提出、登校しての面接指導(スクーリング)、試験を通して卒業に必要な単位を取得します。

※14：専門学校

大学は学問的な研究を行ったり、幅広い知識を身に付けたりすることを目指していますが、専門学校は、ある職業につくための実践的な技術や知識を身に付けることを主な目標としています。卒業後にその学校で学んだことがすぐに活かせる職業に就くことを目指します。

※15：日本語を母語としない子どもと親のための進路ガイダンス

毎年夏に仙台市内で開催されているものです。宮城県の高校入試制度の説明や、高校生の先輩の体験談を聞いたり、学校の先生に個別に相談したりすることができます。この進路ガイダンスでは、日本の教育制度や宮城県の高校入試の仕組みについて多言語で解説している「進路ガイドブック」が配布されます。

※16：高等学校卒業程度認定試験

いろいろな理由で高校に行けなかった人、途中で退学した人などを対象に行われる試験です。合格すると高校を卒業した人と同程度の学力があると認められ、大学、短大、専門学校を受験することができます。

※17：高校の二次募集

通常の入学試験の合格発表の後、募集定員に足りていない公立高校・私立高校では、二次募集が行われることがあります。

※18：A0入試(アドミッションズ・オフィス入試)

大学または学部・学科が、それぞれの「アドミッションポリシー(受け入れ方針)」に基づいて、求めている学生を選ぶための試験制度です。推薦入試と違って、多くの場合は高校からの推薦は必要ありません。受験する生徒が、自分でその大学に行きたい理由や、高校生活の成果などを、応募書類や面接で積極的にアピールする必要があります。出願条件や試験内容は大学・学部・学科によって違います。

※19：オープンキャンパス

大学、専門学校、高校などが、学校のことを知ってもらうために、週末や夏休み期間中に施設を開放します。オープンキャンパスの日は、学校を見学したり、学校生活について話を聞いたりすることができます。

※20：MIA 日本語サポーター

宮城県国際化協会(MIA)が紹介している、マンツーマンで日本語学習のお手伝いをするボランティアです。

※21：非常勤講師の配置

宮城県教育委員会では、日本語能力が不十分な児童生徒の支援のため、学校からの申請に基づいて、日本語指導を行う非常勤講師の配置を行っています。配置される時間数と期間はケースによって異なります。仙台市教育委員会でも同様の制度があり、原則として、教員免許のある日本人が配置されます。

※22：MIA 外国籍の子どもサポーター

宮城県国際化協会(Miyagi International Association/MIA)では、外国籍児童生徒の在籍する小・中学校からの依頼を受け、学校に「外国籍の子どもサポーター」を派遣しています。外国籍の子どもサポーターは、児童生徒の日本語学習や教科学習のサポート、学校側と児童生徒・保護者との間の通訳などをします。派遣回数は、市町村の派遣制度と併せて児童生徒一人につき最大40回です。仙台市内の学校の場合は、市教育委員会から「指導協力者」が最大30回まで派遣されるので、MIAからは10回の派遣となります。

※23：私立高校の推薦入試

一般入試よりも先に行われる、私立高校を第一志望とする生徒のための試験です。宮城県内の私立高校の推薦入試は、全て同じ日に行われます。出願できる条件や試験科目は学校によって異なりますが、面接や作文が課されることが多いです。

※24：国際教室

外国籍児童生徒が多数在籍する仙台市立の小・中学校のなかには、専任の教員が配置されているところがあります。そうした学校では、児童生徒を取り出して日本語指導、教科指導を行う国際教室が設置されたり、個別の指導が行われたりしています。B.G.さんが通った国見小学校は、学区内に暮らす外国人が多いため、以前から国際教室が恒常的に設置されています。

※25：塾(学習塾)

小学生、中学生、高校生を対象として、学校での時間外に、学校での勉強の補うための指導や進学のための指導を行う、民間が運営する施設です。

※26：当時あった推薦入試の制度

宮城県の公立高校の入試には、以前は、調査書等をもとに合格者を決める推薦入試の制度がありましたが、現在はありません。

※27：仙台市教育委員会の指導協力者

仙台市教育委員会では、外国籍児童生徒が在籍する仙台市立の小・中学校に、依頼に応じて「指導協力者」を派遣しています。指導協力者は、児童生徒の日本語指導など、学校生活が円滑に進むお手伝いをします。

このほか、県内の市町村では、石巻市教育委員会が支援員を小・中学校に派遣しています。また、他の自治体でも、必要に応じて支援の人材を配置する場合があります。

※28：指定校推薦

大学が指定した高校だけを対象とした推薦入試で、多くの私立大学で行っています。成績、部活動、課外活動などの実績をもとに、大学が示した条件に合う生徒を高校が選びます。高校から推薦された生徒は、ほぼ全員が合格します。

外国籍児童生徒の支援を行っている団体

公益財団法人宮城県国際化協会(MIA)
<p>県内の多文化共生推進のためにさまざまな事業を行っている団体です。小・中学校で、外国籍児童生徒の日本語学習や教科学習の支援をする「外国籍の子どもサポーター」の派遣を行っているほか、教材や支援者用の参考資料の整備・貸し出しもしています。外国籍児童生徒の教育や支援に関する相談にも応じています。また、外国人向けの日本語講座を開いているほか、マンツーマンで日本語の学習支援をするボランティアの紹介も行っています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・所在地：仙台市青葉区堤通雨宮町 4-17 宮城県仙台合同庁舎 7 階 ・TEL: 022-275-3796 ・E-mail: mail@mia-miyagi.jp
公益財団法人仙台観光国際協会(SenTIA)
<p>仙台市内における多文化共生の地域づくり、外国人観光客の受入促進などを行っている団体です。外国につながる子ども、保護者、受け入れる学校のサポートのために、通訳やコーディネーターの派遣、教材の紹介などを行っているほか、「夏休み教室」を開いたりしています。また、日本語の学習支援をするボランティアの紹介を行っているほか、仙台市との共催で、日本語講座を開設しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・所在地：仙台市青葉区一番町 3-3-20 東日本不動産仙台一番町ビル 6 階 ・TEL: 022-268-6260 ・E-mail: kokusaika@sentia-sendai.jp
外国人の子ども・サポートの会
<p>公共施設のフリースペースなどで、放課後や週末に外国人の子どもに日本語や教科学習の個別のサポートを行っています。学習の曜日と時間は相談して決めます。また、子ども、保護者、支援者による交流会も開催しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・TEL: 090-2793-8899 ・E-mail: jets@sda.att.ne.jp Tadokoro12@yahoo.co.jp
NPO 法人 ICAS(アイカス)国際都市仙台を支える市民の会
<p>青葉区中央市民センターが主催する、外国から来た小・中学生向けの日本語講座「さっと日本語クラブ」で日本語指導を行っています。また、大人向けの日本語講座も開設しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・E-mail: npo.icas@gmail.com <p>◎さっと日本語クラブ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会場：青葉区中央市民センター(仙台市青葉区一番町 2-1-4) ・開設時間：毎週土曜日 10:00～12:00 ・問合せ：TEL 022-223-2516
いんみん 瀛華中文字学校
<p>子どもを主な対象とした中国語教室で、中国出身者の人たちが教えています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会場：エスポール宮城(宮城県青年会館)(仙台市宮城野区幸町 4-5-1) ・開設時間：毎週日曜日 10:00～12:00 ・問合せ：TEL 022-293-4631
ハングル学校宮城
<p>在日本大韓民国民団宮城県地方本部(民団宮城)が主催する、韓国にルーツを持つ子どもが韓国語・韓国文化を学ぶための教室です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会場：韓国会館(仙台市青葉区本町 1-5-34) ・開設時間：土曜日 13:00～17:00(年間 25 回) ・問合せ：TEL 022-263-6961(月～金)

Case Studies of Assistance for non-Japanese Schoolchildren
~ working to secure a better future for children of a multi-cultural background ~

Preface

As the overall number of non-Japanese residents of Miyagi Prefecture increases, more and more children of multi-cultural backgrounds can be seen attending school here. Because of differences in language and culture, such children tend to be more prone to problems such as isolation and being unable to keep up academically. Even so, many of these children succeed in proceeding on to senior high school and more, overcoming the many obstacles set before them both by their own efforts and also thanks to the help received not only from their teachers at school, but also the board of education and various other groups.

This publication attempts to show how some of these children have managed to overcome the difficulties by utilizing various support systems. They can now act as the adults, the teachers and the supporters for the children that come after them.

It is sincerely hoped that this publication will be of use to non-Japanese children and their parents or guardians, and also the teachers of the schools they attend, as a reference work for what steps can be taken to secure a brighter future for these children.

March 2019

Miyagi International Association (MIA)

About the Publication

This publication covers case studies of 10 non-Japanese schoolchildren living in Miyagi Prefecture and introduces what kinds of support programs they used both in and outside of school to achieve their goals. The keywords that come up in each case study (numbered and bolded) can be found and explained at the end of all the case studies.

In addition, at the end of each case study, there is commentary from Ms. Tadokoro, representative of the “Foreign Residents’ Child Support Group,” reflecting on the examples of support found in the study. Ms. Tadokoro’s commentary also includes plenty of advice to help children secure a brighter future.

At the end of this publication, a list of groups engaged in support for non-Japanese schoolchildren can be found.

Case 1: O.S. (country of birth: China)



After coming to Japan, O.S. entered junior high school at the second year level, **one year below what would be normal for his actual age**[1]. At the same time as attending junior high school, he also studied Japanese language through the **MIA Japanese Course**[2], and received tuition from the **Foreign Residents' Child Support Group**[3]. He also attended **SAT Nihongo Club**[4] on Saturdays.

When the time came to think about further education, he decided to take the entrance exam for **prefectural senior high schools**[5] after his guardians consulted with his school and the Board of Education. Application for **special consideration**[6] resulted in him being able to take his tests for social studies, science, and Japanese language in a different room with extended time. He was also allowed to take the English and math tests in a separate room. Additionally, he wrote an essay and took an interview.

After entering senior high school, he found it very hard to keep up at first, but diligently made sure to ask the teachers questions about what he couldn't understand, making use of break times and after classes had finished. Looking back, O.S. emphasizes, "It seemed obvious to me that teachers would explain what you couldn't understand, so I had no stigma about asking lots of questions." One thing he said he found very helpful was having the teacher write the phonetic readings of Chinese characters above the characters in his textbook. He also continued his studies with the Foreign Residents' Child Support Group.

After achieving good results in senior high school, he succeeded in entering the School of Project Design in Miyagi University, through **admission by recommendation**[7]. As a university student, he also devoted himself to helping younger non-Japanese children who were in a similar situation to what he had gone through.

O.S. graduated from university and found employment with a construction company, where he is now working as a productive and integrated adult member of society.

Comments on the support given to O.S.



O.S. understood this point: **just making an effort doesn't automatically end in a good result; you have to set goals, decide what is necessary to achieve them, and then make your effort with a firm resolve.** He also received advice from his aunt, who had had experience studying at a Japanese university as an overseas student. At the time O.S. was in junior high school, his teachers weren't aware of the special consideration system, so it was his father who informed the school about it after consulting with the Miyagi Prefecture Board of Education. His father's firm support was a great help to O.S.

In university, he studied with a concrete goal in mind: taking the test to become a registered architect with a second-class license after graduating, and finding a place of work where he could continue his studies to get a first-class license. He is currently pursuing this goal while working.

Case 2: K.T. (country of birth: South Korea)



K.T. came to Japan at the age of 16 after having graduated from junior high school in his home country of Korea. He studied Japanese intensively at a private Sendai **Japanese language school**[8] and also with the **Sendai Japanese Language Course**[9] and **MIA Japanese Course**[2], as well as studying math and English with the **Foreign Residents' Child Support Group**[3]. He then decided on his choice of senior high school after ascertaining the **necessary procedures to apply to public senior high schools for students coming to Japan after having graduated from junior high school**[10].

He **visited his chosen senior high school several times beforehand to consult about the entrance exam**[11]. Since his Japanese language ability showed a marked improvement in the time between his first and second visits, this was a chance to show the school staff how hard he was working to improve himself.

Upon arriving in Japan in October, he took the entrance exam the following March. After receiving **special consideration**[6] he was tested in math and English (with a 10 minute extension for each) and also had to write an essay and undergo an interview, after which he was accepted into his school of choice. Even while at senior high school, he continued to receive tuition from the Foreign Residents' Child Support Group mainly for his school subjects.

In order to enter university, K.T. took a different path than usual: he didn't graduate from his Japanese senior high school, but temporarily returned to Korea, where he obtained certification of graduation level from a Korean senior high school. He then took the **EJU**[12] and applied to Miyagi University as an overseas student, ultimately gaining admission there.

While at Miyagi University, K.T. studied twice in the USA, improving his English ability, and is set to look for employment this spring.

Comments on the support given to K.T.



When students apply for special consideration to enter senior high school after having graduated from junior high in their home country, **it is extremely important that they show the teaching staff what they want to do in the future, what they want to do in high school, that they are determined to study hard in their regular classes and also that they are working to improve their Japanese proficiency. They also need to make the teachers aware that they can spend a productive 3 years at the school.**

After entering senior high school K.T. at first had some trouble adjusting to the dynamics of life at the school and social interactions with his schoolmates, all of which showed differences between Japanese schools and their Korean counterparts, but gradually got used to them. This is the advice he had for younger children in a similar situation: "If you want to make friends, you have to observe the people around you really carefully. When you decide 'that looks like a nice person' it's a good idea to imitate their behavior, but you also have to always be true to yourself and not do anything that goes against your basic principles."

Case 3: S.S. (country of birth: China)



S.S. arrived in Japan after graduating from junior high school. After studying Japanese language with the **MIA Japanese Course**[2] he went on to study at a **correspondence senior high school**[13]. Education at this type of school is mainly carried out by the submission of papers, while credits are gained by also taking tests and schooling carried out at the school itself. S.S. wrote his papers with assistance from staff from the **Foreign Residents' Child Support Group**[3]. Because test questions are based on these papers, doing them well is a key factor to getting good school results. Any points in the papers that S.S. had trouble understanding were carefully explained by a teacher at the school during the schooling sessions.

S.S. was interested in car maintenance, so after graduating from senior high school went on to study car maintenance at a **technical college**[14] and is now working at an official car-maker affiliated garage.

Comments on the support given to S.S.



S.S. was born in Heilongjiang Province in China, where the Japanese car maker T had a manufacturing plant. His aim after senior high school was to get car maintenance skills by attending technical college so that he could work on cars manufactured by T. On hearing this, his father helped him with his application to technical college, and he also received additional educational support from his high school.

Once a student decides what they want to do after senior high school, the teaching staff can provide support to attain this goal through education and also through career guidance advice. However, if the student doesn't know what he/she wants to do, it's difficult to provide any concrete assistance.

.....

Case 4: S.H. (country of birth: Japan/long term residence: Philippines)



S.H. was born in Japan. After 8 years residing in Japan, her family moved to the Philippines, where she completed her education as dictated by Philippine law at the time, with 6 years in elementary school and 4 in high school. She returned to Japan at the age of 16. While she would have been ready to proceed on to university in the Philippines, in Japan she couldn't do this because she was lacking 2 years of secondary education as stipulated by the country's education system. While in the Philippines she had studied Japanese a little, but had forgotten most of it.

As a result of her father's participation in "**High School Guidance for Children and Parents who are Non-native Japanese Speakers**"[15] she started to get tuition from

the **Foreign Residents' Child Support Group**[3], studying math, English, writing and kanji Chinese characters. She also took the **Sendai Japanese Language Course**[9].

The first options she considered were going to **technical college**[14], going to university after obtaining **secondary school level certification**[16] or finding employment. However, after actually visiting senior high school and getting an idea of what the classes and club activities were like, she began to think about attending senior high school.

She failed to get accepted for her first choice of school, a prefectural senior high near her home, and so she then applied to another prefectural senior high through the **additional recruitment program**[17] for which she was accepted. For both of these applications she made use of the **special consideration option**[6] and was tested in math and English, wrote an essay and underwent an interview.

Her school placed a strong focus on inter-cultural education and understanding and many of the students there were greatly interested in English and other cultures. This proved to be a great help to S.H. and through classes and club activities at the school even she herself gained a more global outlook. She continued to study hard, and thanks to her efforts and grades succeeded in her **application by recommendation**[7] to Miyagi University.

While at university she actively participated in club activities and also helped to support Philippine children who were in a similar situation to what she had experienced. She is set to graduate and become a full adult member of society this spring.

Comments on the support given to S.H.



S.H. found herself at a turning point in her life when she found out that she hadn't fulfilled the conditions to go on to study at a Japanese university. It was probably a hard choice for her to decide to try for entry to Japanese senior high school despite having already graduated from high school in the Philippines. However, this choice resulted in her spending time with the high school teachers, making new friends and learning many new things. Also, she was made aware of the advantages of her situation spanning two countries, cultures and languages. It became one of her aims to learn academic and technical skills in Japan and then use them for the benefit of the Philippines, a country that she loved very much.

Coming to Japan from another country involves many changes in lifestyle and unexpected choices, and the thought of how those choices may affect you can be worrying. Observing non-Japanese children in senior high schools makes me realize that they gained more strength and resilience through feelings of hardship and loneliness, dissatisfaction and overcoming other challenges in a completely new environment from what they had previously experienced, and amidst new personal relationships. **It's important to talk to others and gather enough information. In doing so you can discover all the choices open to you and not be limited to just one. You have to think and act proactively for yourself. The most important thing is to make your own choices.**

Case 5: C.M. (country of birth: China)



C.M. arrived in Japan after graduating from junior high school. He received tuition help in various subjects from the **Foreign Residents' Child Support Group**[3] and studied Japanese language with the **MIA Japanese Course**[2].

Because he did particularly well at English, he chose to enter a senior high school that placed emphasis on English language teaching. After visiting several schools, he decided to try for the international course of a prefectural senior high school, since the atmosphere of the school suited him best. Visiting the school several times had given him the opportunity to show the teaching staff there that his Japanese ability was improving.

For the school entrance exam, he applied for **special consideration**[6] and was tested in English and math, wrote an essay and had an interview, after which he was accepted. He led a productive school life, partly thanks to his naturally cheerful and outgoing personality. Some of the teachers even went so far as to say that C.M. coming had improved the mood of the school. He was a member of the basketball club and took part in matches against other teams.

He continued to study hard, and along with continued tuition from the Foreign Residents' Child Support Group set his sights on university.

C.M. was admitted to the Faculty of Liberal Arts, Tohoku Gakuin University through the **AO entrance exam**[18]. In addition to working hard at his studies and club activities he also not only took part in symposiums and conferences outside the university, but also made sure to actively speak up and state his own opinions at these events. He is set to become an independent adult member of society from April.

Comments on the support given to C.M.



When C.M. first arrived in Japan, he said that he enjoyed using his mind. I think he probably enjoys doing new and fun things with the people around him to about the same extent. This is what he said when he was a senior high school student: "People say that it's important to read the situation well, but I think it's even more important to mold the situation into what you want it to be." Talking about class discussions, he said, "I would make a proposal and the girls would say 'no.' If I made another proposal they would shoot it down again." The way he said it made it sound like he was unhappy about it, but you could see that it was being carried out in a lively atmosphere.

It's important to have confidence in yourself, and to make it clear when you like something. You should also find something you like and are good at. All of this can act as a guiding light for you. Looking back, you can see your footsteps and how far you have come.

Case 6: O.Y. (country of birth: China)



O.Y. came to Japan having left his Chinese senior high school partway through his studies. He entered a private senior high school when he arrived in Japan. While he was not proficient in Japanese at the time, he was extremely keen to study, and passed his 3 years at the school without a single absence. In addition to always being well prepared for his classes, he also made sure to ask teachers about the things he didn't understand, something which he had been advised to do by older Chinese acquaintances. In his school tests, while he had problems with the Japanese language and history segments, he always obtained good results for other subjects such as math, English, chemistry and biology.

He also studied in a variety of ways outside school class time, such as attending the **MIA Japanese Course in evenings**[2]. For a total of 60 classes across 3 semesters, he was only absent for one day, when a university **open day**[19] event clashed with classes. He received additional tuition for his studies from the **Foreign Residents' Child Support Group**[3] and the **MIA Japanese language supporter system**[20]. He also received Japanese language help from a Japanese man whom he became acquainted with while studying in a public facility free area. Looking back at that time, O.Y. says, "It was really hard work because the regular subject study and the Japanese language study were both going on at the same time."

O.Y. had a special interest and penchant for science, and the life sciences in particular, even going so far as to buy his own microscope and dissection kit and try dissecting and studying fish that he had caught. He decided to continue his studies at Tohoku Pharmaceutical University (now Tohoku Medical & Pharmaceutical University). As well as receiving extra coaching from his schoolteachers, he visited the university several times on its open days, getting advice from the staff and listening in on lectures. This diligent information gathering bore fruit when he was accepted into the Department of Pharmaceutical Life Sciences through **admission by recommendation**[7]. Although he was forced to spend extra time studying by himself even before entering university, he found himself having to spend even more time doing so after advancing to the university itself. However, because it is his field of interest, O.Y. says he has no regrets and it's proving enjoyable and informative. Every day, he spends over 12 hours conducting experiments in the research lab. He intends to go on to graduate school, with a view to becoming a researcher.

Comments on the support given to O.Y.



O.Y. had an interest in biological science even before coming to Japan, probably because of his awareness of the concept of "life." He always treats others with respect and never raises his voice or fights with them. I think this may have had something to do with the fact that he was older than his compatriots in senior high school. He continued to study hard, never losing sight of his original goal, and he was supported in this by the teaching staff at school.

For people intending to go on to study life sciences, it's vital to be able to understand the explanations and formulae in Japanese senior high chemistry textbooks and solve the problems in them. O.Y., like many other similar students, studied Japanese once he had arrived in the country, and worked extremely hard during his 3 years in senior high school, which I'm sure was not easy at all.

I always recall a certain thing to do with O.Y.'s learning. He was talking about the methods he had used to study Japanese to a group of younger students and their guardians, and showed them a book of the notes he had made, one on Japanese grammar. He made the

same kind of notebook record for his regular school classes, too, and also showed his experiment notes to them.

For O.Y., the actual act of writing his notes was an aide to him remembering and learning. **Different people have many different styles of learning. It's not something that just happens by magic. You have to try to find the method that suits you, and keep on doing it regularly.**

Case 7: U.C. (country of birth: China)



U.C. arrived in Japan at the age of 15. After a month of study at a **Japanese language school**[8], as preparation towards going on to senior high school, he entered junior high school as a second-year student, **a year lower than his actual age suggested**[1].

In his school there was a Chinese-born **part-time teacher**[21] who gave assistance by interpreting during class. When the teacher was unable to be there, a Chinese **MIA supporter**[22] was sent to the school. While U.C. had some trouble following the classes, he made some good friends at school and participated in club activities, making his school life a pleasant one.

He also received assistance from the **Foreign Residents' Child Support Group**[3], who helped most of his regular subject studies.

He entered a private senior high school by means of **admission by recommendation**[23], where he has integrated well, also being involved in the school's sports club and taking part in national competitions.

Comments on the support given to U.C.



I first met U.C. when he had just started to study Japanese. When I asked him what he liked to do, he immediately replied that he liked cycling. A little more questioning told me that when he had time he enjoyed cycling to places he had never been to before and seeing new scenery for the first time. Asking him what he wanted to do in the future resulted in him coming back with a concrete answer of "Something in sports."

In his 3 years at senior high school he not only studied hard but also joined the bicycle racing club, and apparently is set to take part in a national championship in Kyushu in March, his final month at senior high school. His feeling: "I'm going to do my best to win."

High school is not just a place to learn, but also a place where you can experience new things and make new friends by taking part in after-class club activities. A quick check shows that there are many different clubs in the various high schools. Clubs such as baseball and soccer tend to be concentrated around already skilled students who had been doing these sports in elementary and junior high school. Clubs like kyudo (Japanese archery) and the bicycle racing that U.C. chose usually don't exist in junior high, so everyone joining these kinds of club can start from the same level.

Case 8: B.G. (country of birth: Mongolia)



B.G. came to Japan as a fourth-year elementary school student, entering a Sendai City elementary school. This school was attended by a relatively large number of non-Japanese children, and had an **international support center**[24] with a dedicated staff member. Here, B.G. studied Japanese during the regular Japanese, social studies and science classes. By the final sixth year he was able to communicate in Japanese without any discernible trouble.

While in elementary school he had been receiving support from the **Foreign Residents' Child Support Group**[3]. Once in junior high school, he became busier with club activities among other things and temporarily stopped receiving the support, starting it up again in his final third year when he was required to study for senior high school entrance exams. He also attended a **"juku" school**[25] near his home.

At the time of his entry into senior high school, B.G. had already lived for a number of years in Japan, making him ineligible for **special consideration**[6]. However, he succeeded in gaining entrance to a prefectural school through the **former system of entrance by recommendation**[26]. His time at senior high school brought him experience not only in academic study, but also club activities and part-time work.

The first time he took the regular university entrance exam, he unfortunately failed to get through, so after graduating from senior high school he took, and passed, the **EJU**[12] and was accepted into the School of Project Design, Miyagi University as an overseas student. He chose this field out of the interest he had come to hold in business management as a result of working part time at a restaurant while studying for the entrance exam. He emphasized this as his motivation for wanting to study business in the university during his interview there.

During his time as a student, he also volunteered as a member of the Foreign Residents' Child Support Group, and a member of the Sendai International Students Program run by Sendai Tourism, Convention and International Association.

Comments on the support given to B.G.



When B.G. was in senior high school, he recalled the time when he had just arrived in Japan: "Every day at school made me feel nervous and stressed, but when I got home my parents let me take it easy. This made it possible for me to go to school the next day without worrying too much." His mother, however, speaking separately, said, "I felt bad about not being able to do anything to help my son after he had just arrived in Japan." His mother may have had regrets, but B.G. was grateful for what she did.

It usually takes most students who start Japanese study after coming to the country from 18 months to 2 years to get to a level where they can follow classes at school.

During this period, they miss out on the content of classes, and so need extra study to attain a level where they can take the exam to enter senior high school. B.G. said that the "juku" supplementary school that he attended while he was in junior high school did not have regular classes, but rather individual Q & A sessions where he was able to get tuition on the content that he had missed out on or hadn't studied.

Case 9: D.A. (country of birth: Nepal)



D.A. started attending Japanese elementary school midway through the second year. She received tuition support from a Nepalese overseas student who had been sent to the school by **Sendai Board of Education as a Tutor Assistant**[27]. She learned the phonetic hiragana and katakana alphabets relatively quickly, but had more trouble with kanji Chinese characters, and would ask teachers about how the characters in her textbooks were read, which she would write down over the characters. By the time she entered junior high school she was able to read kanji, too, but still had trouble with text in her Japanese and math classes.

In her second year of junior high school she started to receive mainly academic support from the **Foreign Residents' Child Support Group**[3]. She worked diligently at her studies, memorizing a set number of English vocabulary words, solving math problems, and reading aloud Japanese language texts, all daily. In the process of studying for the senior high school entrance exams, she discovered knowledge gaps in her elementary education, which she strove to fill.

Consultations with her junior high teachers led her to apply for a prefectural senior high school. Once she had decided on the school she wanted to attend, this gave her the impetus to study even harder, sometimes getting up before dawn to do this.

As a result of these efforts, she was able to get into the school of her choice. She continued to receive support from the Foreign Residents' Child Support Group in senior high school, and after graduation, because of her interest in food and cooking, went on to study nutrition at junior college, where she is currently leading a fulfilling life as a student.

Comments on the support given to D.A.



D.A. progressed in her studies by studying regularly a little at a time, refusing to give up. I think she must have continued in this way all through elementary, junior high and senior high school. She is currently studying nutrition, with the aim of helping sick children to get the nourishment they need. She is also planning to open a restaurant serving both Nepalese and Japanese food.

Through her studies of nutrition, she also gained qualifications as a dietitian, a third-grade food coordinator and an information processor, helping to clarify her future aims.

Case 10: R.K. (country of birth: China)



R.K. came to Japan when she was a second-year junior high school student. She attended junior high school in Sendai City, receiving support from a **Sendai Board of Education Tutor Assistant**[27]. The assistant was also from China, and proved to be a great help on the language front. The tutor assistant continued to assist R.K. even after reaching the maximum number of visits by coming as a **MIA supporter**[22] instead.

In addition to this, the school requested a Japanese volunteer to come and assist with chiefly Japanese and math study during the summer vacation. The Japanese volunteer continued coaching at the school even after the MIA supporter had reached the maximum visit number, as R.K. studied for senior high school entrance exams. She unfortunately failed to get admission to her prefectural high school, despite getting **special consideration**[6], and instead went to a private school where she was also able to learn the basics about patisserie, a field she was fond of. She had sometimes made cakes to give as presents to her **Foreign Residents' Child Support Group**[3] helper.

After graduating from senior high school, she initially decided that she wanted to attend **technical college**[14] to study catering, learning about such places and visiting them on **open days**[19], but ultimately, on the advice of her guardians, decided to go to university. Because of her good results, especially in math, she was accepted into Tohoku Institute of Technology through **admission by recommendation for designated schools**[28], where she is set to study design from April.

Comments on the support given to R.K.



Even before she came to Japan, R.K. had an ambition to run her own café. She wanted to organize everything, from serving her own hand-made desserts and designing her own packaging, up to the interior design of the restaurant, creating a place with a pleasant and friendly atmosphere where local people could come and relax. The fact that her father was a Chinese food chef may also have given her a more concrete image about managing such a place.

R.K. ended up having to go to her second choice of senior high school, but this allowed her to learn about patisserie. In her final year of senior high school, she was faced with having to choose which avenue would best help her achieve her goals: technical college or university. Having a choice of future paths to take means that the road is still open to you even if one of them doesn't work out.

Explanation of Keywords

1. Enrollment to classes below actual age

When children not so proficient in Japanese ability are enrolled into elementary or junior high school, they may be assigned to class years lower than their actual age, depending on the judgment of the school and the wishes of the guardians.

2. MIA Japanese Course

Japanese language courses run by Miyagi International Association (MIA). The class levels are Elementary 1, 2, Intermediate, Kanji 1, 2, Evening elementary 1, 2. Evening elementary classes are held every Tuesday 18:30 – 20:30.

3. Foreign Residents' Child Support Group

Citizens' group providing support for Japanese language and general academic study. Volunteers provide individual coaching and tuition for non-Japanese schoolchildren outside of school class times (after school and at weekends), mostly in free areas of public facilities in Sendai City.

4. SAT Nihongo Club

Japanese language classes for elementary and junior high school children organized by Aoba-ku Chuo Shimin Center. The class is held every Saturday 10:00 – 12:00. Classes are taught by members of the NPO ICAS (International Citizens' Association of Sendai).

5. Prefectural senior high school

Senior high schools in Miyagi Prefecture consist of public high schools (run by the prefecture or municipality) and private high schools. Fees tend to be cheaper for the prefectural schools than the private ones.

6. Special consideration for public senior high school entrance exams

When students not so proficient in Japanese language ability take exams to enter public senior high schools, they may be given special consideration. This can include reducing the number of subjects examined or extending the exam time. These measures require prior application to the senior high school by the junior high school. If the student does not attend a junior high school, the guardian can apply directly to the senior high school.

7. University admission by recommendation

A system where students of particular academic or other achievement are admitted to a university by recommendation of their school principal. Admission criteria vary according to the university. Admission by recommendation is carried out before the regular entrance exams, and in most cases is decided by documents submitted by the school, written essays and/or interviews. Some public universities also require recommendation applicants to take the National Center Test for University Admissions in the same way as the regular entrance exams.

8. Japanese language school

Privately run educational institutions which teach Japanese language to people who are not native Japanese speakers. Students at these schools are usually non-Japanese from abroad who have obtained overseas student visas and come to Japan with a view to going on to university, graduate school or technical college after completing their studies at the Japanese language school. Some schools also accept non-Japanese residing in Japan.

9. Sendai Japanese Language Course

Japanese language courses organized by Aoba-ku Chuo Shimin Center and SenTIA (Sendai Tourism, Convention and International Association) geared to non-Japanese. Tuition is free. Classes are taught by members of the NPO ICAS (International Citizens' Association of Sendai).

10. Necessary documentation for student graduates of junior high schools outside Japan to apply to public senior high schools in Miyagi

Students from junior high schools within the prefecture apply through their schools. Those who are not enrolled in prefectural junior high schools must submit the necessary documentation individually. There are two stages to this process. First, the student must receive permission to apply. Once the student has received permission, they can then apply for admission by submitting the necessary documentation. The following are usually required:

① Documentation for permission to apply

- form for permission to apply to Miyagi public senior high schools (can be downloaded from the website of the Miyagi Board of Education's Upper Secondary Education Division)
- copy of proof of completion of 9 years of school education (issued by most recent enrolled school), or Certificate for Students Achieving the Proficiency Level of Lower Secondary School Graduates (issued by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology)
- copy of certificate of residence (listing status of residence)

② Documentation for application

- application for admission and photo sheet (Miyagi revenue stamp attached)
- copy of proof of completion of 9 years of school education (issued by most recent enrolled school), or Certificate for Students Achieving the Proficiency Level of Lower Secondary School Graduates (issued by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology)
- academic transcript from most recent enrolled school, or record of Certificate for Students Achieving the Proficiency Level of Lower Secondary School Graduates (issued by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology)
- list of applicants (can be downloaded from the website of the Miyagi Board of Education's Upper Secondary Education Division)

- copy of confirmation of permission to apply to Miyagi public senior high schools (sent from high school listed in stage ①)
- envelope to send examination ticket (size: 長形 3 号, including name and address of examinee with postage stamp for simplified registered express delivery attached)
- envelope to send results notification (size: 角形 2 号, including name and address of examinee with postage stamp for simplified registered express delivery attached)

11. Senior high school preparatory visit

High school visit prior to enrollment. Many schools have designated “open campus” visit days for this. Orientation explanations are often held, and many schools will allow visits on other days apart from designated open campus days on request. These visits are particularly recommended for those who have come to Japan after graduating from junior high schools in their home countries and are not used to Japanese customs as a way to get better acquainted with the school of choice and its atmosphere. Schools may also give advice on their entrance exams and procedures.

12. Examination for Japanese University Admission for International Students (EJU)

Examination evaluating general academic ability and Japanese proficiency. Required for admission to Japanese universities and other institutions, it is mainly aimed at international students wishing to study in Japanese universities. While many universities have adopted this examination, subjects tested vary according to university and faculty.

13. Correspondence senior high school

School in which the student studies mainly at home using prescribed textbooks and/or educational materials without attending the actual school. The only public correspondence senior high school in Miyagi is Mitazono High School. Students get graduation credits by a combination of project submission, schooling (going to the school to get direct counselling/guidance) and exams.

14. Technical college

Where universities aim for a more academic approach regarding research and education across a wide field, technical colleges focus more on teaching knowledge and practical skills for a particular profession. Skills learned at technical colleges can be immediately applied at work after graduation.

15. High School Guidance for Children and Parents who are Non-native Japanese Speakers

Organized every year in summer in central Sendai. Includes things such as advice on the

Miyagi senior high school entrance exam system, talks from current senior high students about their experiences, and individual consultations with teachers. Participants in the guidance can receive the “Shinro Guidebook” giving information in multiple languages on Miyagi senior high school entrance exams and the Japanese education system in general.

16. Certificate for Students Achieving the Proficiency Level of Upper Secondary School Graduates

Exam for people who were unable for various reasons to attend senior high school or who left school without properly graduating. Acts as proof of an education level equivalent to that of a senior high school graduate and can be used for entrance to higher education such as universities, junior colleges and technical colleges.

17. Additional student recruitment

After entrance exam results have been announced, some public and private high schools carry out a secondary recruitment drive to fill places for classes that have not fulfilled their quota numbers.

18. AO (admissions office) entrance exam

Entrance exam system in which universities or their faculties or departments select students they particularly want according to their admissions policy. Differs from entrance by recommendation in that in many cases recommendation from the student's school is not required. Exam participants have to actively “sell” themselves through interviews and submitted documents, including high school results and their reasons for applying. Qualification requirements and exam styles differ according to the university, faculty and department.

19. Open day for prospective students

Universities, technical colleges and high schools hold open days, usually at weekends or during summer vacation, where they open their facilities to prospective students to allow them to get to know the institution better. Known in Japanese as “open campus” these events also give information about various aspects of school/university life.

20. MIA Japanese language supporter

System of volunteers who give individual Japanese language tuition and advice, organized by Miyagi International Association (MIA).

21. Part-time teacher

Part-time teachers dispatched by Miyagi Board of Education on request of the school to teach Japanese language to students whose Japanese proficiency is insufficient. Period of time and hours spent at the school vary case by case. Sendai Board of Education has a similar system, dispatching, as a rule, Japanese nationals with a teaching license.

22. MIA supporter for non-Japanese children

Supplied by Miyagi International Association (MIA) on request to elementary and junior high schools attended by non-Japanese students. Supporters provide assistance with Japanese language teaching and other regular studies, and can help with interpreting between the school and the students and their parents or guardians. In conjunction with support programs from the local authorities, supporters have provided assistance for up to 40 times for a single student. For this Sendai school, the Board of Education dispatched a tutor assistant a maximum of 30 times, meaning the remainder of 10 times was provided by MIA.

23. Admission to private senior high schools by recommendation

Admission system for students for whom private senior high schools are their first choice, carried out prior to the regular entrance exam. In Miyagi Prefecture, all private senior high schools carry out the test on the same day. Admission requirements and subjects tested vary according to school, but many use interviews and written essays.

24. International support center

Some Sendai elementary and junior high schools with a number of students of foreign nationality are allotted a dedicated member of staff. These schools can also organize an international support center as a place to give these students supplementary and individual tuition in Japanese language and other subjects. B.G.'s school, Kunimi Elementary School, has had a permanent international support center for some time because of the number of non-Japanese living in the school's catchment area.

25. “Juku” supplementary school/cram school

Often known in English as cram schools because of their major focus on preparing students for school and university entrance exams, these private institutions also offer extra classes outside school hours to elementary, junior and senior high school students to help and reinforce their understanding of the school curriculum.

26. Former entrance exam by recommendation

Previous entrance exam by recommendation for public Miyagi senior high schools, in which applicants were passed or failed based solely on submitted documentation, but this has been abolished.

27. Sendai Board of Education Tutor Assistants

Teaching assistants dispatched on request by Sendai Board of Education to Sendai public elementary and junior high schools attended by non-Japanese students. These assistants help to keep the school running smoothly and also help with Japanese language study.

In other Miyagi municipalities, for example, Ishinomaki Board of Education sends assistants to elementary and junior high schools, as is the case with some others, too.

28. Admission by recommendation for specially designated schools

System of admission by recommendation carried out by many private universities which is only applicable to high schools designated by the university. Applicants are selected by the school based on academic results, club activities and other extra-curricular activities according to criteria laid out by the university. Almost all students applying through this system are accepted by the university.

Groups Engaged in Support for Non-Japanese Schoolchildren

<p>Miyagi International Association (MIA)</p> <p>Involved in many projects promoting multi-culturalism in Miyagi Prefecture. Organizes the MIA supporter for non-Japanese children program, sending helpers to elementary & junior high schools to assist with Japanese language tuition and supplementary help with regular classes. Also collates and loans out teaching and reference materials. Provides counselling for the support and education of non-Japanese schoolchildren. Organizes Japanese language classes for non-Japanese and can introduce volunteer Japanese language tutors for individual study.</p> <ul style="list-style-type: none"> • Location: 7th Floor, Miyagi-ken Sendai Godochosha 4-17 Tsutsumi-dori Amamiya-machi, Aoba-ku, Sendai • TEL: 022-275-3796 • E-mail: mail@mia-miyagi.jp
<p>Sendai Tourism, Convention and International Association (SentTIA)</p> <p>Involved in promoting multi-culturalism in Sendai City and improving the city's capacity to cope with tourists from outside Japan. Provides interpreting & coordination assistance to schools and parents with non-Japanese children, also advising on teaching materials and organizing summer vacation study groups. Can introduce volunteer Japanese language tutors, and organizes the Sendai Japanese Language Course in conjunction with Sendai City.</p> <ul style="list-style-type: none"> • Location: 6th Floor, Higashi-Nihon Fudosan Sendai Ichiban-cho Building 3-3-20 Ichiban-cho, Aoba-ku, Sendai • TEL: 022-268-6260 • E-mail: kokusaika@sentia-sendai.jp
<p>Foreign Residents' Child Support Group</p> <p>Provides individual study support in Japanese language and other school classes, carried out after school and at weekends usually in free areas of public facilities. Days and times when the support is carried out are decided by mutual agreement. Also organizes social events for children, their parents and supporters.</p> <ul style="list-style-type: none"> • TEL: 090-2793-8899 • E-mail: jets@sda.att.ne.jp Tadokoro12@yahoo.co.jp
<p>International Citizens' Association of Sendai (ICAS)</p> <p>Teaches Japanese at the SAT Nihongo Club, a Japanese language class suited for children from outside Japan attending elementary or junior high school. The class is organized by the Aoba-ku Chuo Shimin Center. ICAS also runs Japanese language classes for adults.</p> <ul style="list-style-type: none"> • E-mail: npo.icas@gmail.com <p>◎SAT Nihongo Club</p> <ul style="list-style-type: none"> • Venue : Aoba-ku Chuo Shimin Center(2-1-4 Ichiban-cho, Aoba-ku, Sendai) • Hours : Saturdays 10:00-12:00 • Enquiries : TEL 022-223-2516
<p>Inka Chinese School</p> <p>Organizes Chinese language classes best suited to children, taught by Chinese native speakers.</p> <ul style="list-style-type: none"> • Venue : Es-poru Miyagi (Miyagi-ken Seinen Kaikan) (4-5-1 Saiwai-cho, Miyagino-ku, Sendai) • Hours : Sundays 10:00-12:00 • Enquiries : TEL 022-293-4631
<p>Miyagi Hangul School</p> <p>Teaches Korean language and culture to children of Korean descent, run by the Miyagi branch of Mindan (Korean Residents Union in Japan)</p> <ul style="list-style-type: none"> • Venue : Kankoku Kaikan(1-5-34 Hon-cho, Aoba-ku, Sendai) • Hours : Saturdays 13:00-17:00 (25 sessions per year) • Enquiries : TEL 022-263-6961 (Monday-Friday)

「外国籍学生支援事例集～为了开辟有多文化背景的孩子们的未来～」

前言

随着居住在宫城县内的外国人数的不断增加，有多样文化背景的孩子在学校里学习的现象已不再罕见。

基于语言和习惯的不同，这些孩子更易陷入学习跟不上，与外界孤立的困难局面。身处这样的状况，仍然有许许多多的孩子在学校老师的指导下，在教育委员会及各种团体的支援下，坚持不懈努力，克服多种困难考上高中，进而又向着下一个目标迈进。

这些孩子，有的已经走上社会，作为前辈，支援和激励着后来之輩。他们当时都利用了什么样的支援制度，各自又都走过一条什么样的路？本书特将他们的事例汇编成集。

诸位外国人子女及家长，接收学校的老师们，在探讨应该怎么做才能更有益于孩子的未来发展时，可将本书作为一个资料参考借鉴。

2019 年 3 月

公益财团法人宫城县国际化协会（MIA）

关于本事例集

本事例集介绍了居住在宫城县内的 10 名外国籍学生，他们在校内外都通过利用什么样的支援制度，从而实现了自己的目标。各事例介绍中出现的关键词（黑体数字标注），在所有事例介绍的后面统一加以说明。

另外，在所有事例介绍的后面，登载有「外国人子女支援会」的代表田所女士在回顾每一位孩子的支援事例时的体会和感受。在思索・探讨如何去开拓孩子的未来时，定会得到不少启发。

卷末有外国籍学生支援团体的介绍。

事例 1 O. S. (中国出身)



O. S. 来日本当初，**降低一学年插班进了初二(※1)**。上初中期间，一直在 **MIA 的日语夜间讲座(※2)** 学日语。另外除在 **外国人子女支援会(※3)** 支援者的辅导下学习教科外，周六，还在 **简明日语俱乐部(※4)** 学习日语。

就升学问题，经过家长向学校和教育委员会咨询，决定报考 **县立高中(※5)**。申请了 **优惠制度(※6)** 后，社会，理科和国语考试单独在别室实施，时间也得以延长。另外，英语和数学考试也是单考的。还通过了作文考试和面试。

进高中后，刚开始学习很吃力，于是，遇到不懂的地方就利用课间休息及课后时间主动向老师请教。回顾当时，O. S. 说「学生有不懂的地方，老师给与指导，这是很自然的事。所以一有问题就毫不犹豫地老师请教」。有的老师在教科书上还特意为自己标上读音，对自己帮助非常大。除了在学校的学习之外，还继续接受外国人子女支援会的支援者的辅导。

高中以优异的成绩毕业，通过 **推荐入学考试(※7)**，进入宫城大学的事业构想学部学习建筑。大学期间，还热心帮助同样是外国出身的后辈们。

大学毕业后就职于一家建筑公司。走上社会后，每天过着繁忙的生活。

回顾 O. S. 的支援



O. S. 明白，只靠一味地努力并不一定能取得结果，还需要去思考为了达到目标应该怎样去做，并以坚强的意志不懈努力。曾在日本的大学留过学的姑姑也给了 O. S 一些建议。当时，由于中学的老师还不知道有「优惠申请」制度，O. S 的爸爸到宫城县教育委员会咨询，将得到的信息转达给学校的老师。家长的热心也对 O. S 是一个很大的促进。

大学期间，O. S 对自己的将来已经有了一个具体的设想，毕业后考下二级建造师资格，就职要选择一个可以继续学习考一级建造师的单位。在校期间学习目的就很明确。现在一边工作，一边在为实现梦想继续学习。

事例 2 K. T. (韩国出身)



K. T. 在韩国中学毕业后，16 岁来日。当时除在仙台市内民间的 **日语学校(※8)**，**仙台日语讲座(※9)**，**MIA 日语讲座(※2)** 集中学习日语外，在数学和英语的学习方面，还得到 **外国人子女支援会(※3)** 的支援者的辅导。**向县高中教育课咨询了中学毕业后来日的学生怎样报考公立高中等，(※10)**，最后决定了自己的志愿学校。

关于应试，多次到志愿校去咨询(※11)。第二次去学校时，由于自己的日语相比第一次，有了明显的提高，有机会让老师们看到了自己的努力和成长。

10 月份来日，第二年 3 月考高中。因申请了**优惠制度(※6)**，只考了数学，英语(考试时间还允许各延长 10 分钟)，作文和面试，如愿进了自己理想的高中。高中期间，继续在「外国人子女支援会」支援者的辅导下学习，以教科学学习为主。

K. T. 考大学，选择走的是一条与通常不同的途径。高中毕业前一度回韩国，考下了韩国高中毕业的资格。又通过了**日本留学考试(※12)**，以留学生身份进入宫城大学。

大学期间，曾两次赴美短期留学，英语能力也因而得到提高。今春将就职。

回顾 K. T. 的支援



从本国的中学毕业后来日本的学生，在「优惠申请」时，**重要的是要让学校知道自己将来的愿望，在高中想做的事，入学后会认真地学习教科和日语，完成高中三年的学业。**

K. T. 进校当初，由于韩国和日本和学校生活和朋友间的交往方式的不同，经过了一个困惑时期。不过渐渐就习惯了。K. T. 对刚来日本的后辈说过这样的话，「找朋友，先要对周围的人仔细观察。要是觉得『这个人是好人。』的话、可效仿那个人。只是不可忘记的是，失去自己个性的事情一定不要去做。」

事例 3 S. S. (中国出身)



S. S. 中学毕业后来日，在**MIA 日语讲座(※2)**学习日语后，进入**函授高中(※13)**学习。函授高中的学习，平时主要是以向学校提交学习报告的形式，另外还需要完成一定次数的面授，并通过考试来取得学分。向学校提交的学习报告，是在**外国人子女支援会(※3)**支援者的辅导下完成的。由于考试内容出自平时的报告，所以，只要认真写好每次的报告，就能得到学分。不懂的地方，面授时得到高中的老师细致地指导。

S. S. 由于对汽车维修感兴趣，高中毕业后，进了一所**专科学校(※14)**学习汽车维修。现在在一个汽车制造厂旗下的维修工厂工作。

回顾 S. S. 的支援



S. S. 出身于黑龙江，当地有日企 T 公司的汽车制造厂。高中毕业后打算在专科学校学习汽车维修技术，将来有机会维修 T 公司的汽车。爸爸知道了 S. S. 的想法后，帮助办理了专科学校的报考手续。学习方面，也得到了高中老师的指导。

学生决定了毕业后的方向后，会得到高中老师在学习和升学方面的指导。反之，如果自己将来想做什么决定不了的话，升学指导也无法进行。

事例 4 S. H. (日本/菲律宾出身)



S. H. 出生于日本。在日本生活了 8 年后，随家人一起移住菲律宾。在当地上完小学 6 年，高中(high school)4 年，完成了当时菲律宾的一般教育后，16 岁时回到日本。虽说在菲律宾已经到了可以上大学的年龄，但是按日本的教育制度，中等教育的年数还差两年，所以还不能报考大学。在菲律宾期间，也继续学过一点日语，但也忘得差不多了。

S. H. 的爸爸参加了「**为不以日语为母语的孩子和家长准备的升学指导**」(※15)后，S. H 开始在**外国人子女支援会**(※3)支援者的辅导下学习。在数学，英语，作文，汉字等学习方面下了不少功夫。除此之外，还在**仙台日语讲座**(※9)学习日语。

是进**专科学校**(※14)，还是先考下**高中毕业程度认定资格**(※16)后上大学，还是就职，经过了一段时间的考虑。通过去高中访问，参观课堂和课外俱乐部活动后，最后还是决定考高中。离家近的一所县立高中遗憾没考上，于是报考了有**二次招生**(※17)的另一所县立高中，顺利合格。这两次考试都是利用了**优惠制度**(※6)，只考了英语，数学，作文和面试。

由于这所高中热心于国际理解教育，有很多对异文化和英语感兴趣的学生。这对 S. H. 非常有利。通过课堂学习和课外俱乐部活动，S. H. 自身也开始以全球化视点来思考问题了。入校后在学习上仍继续努力，因而成绩也不断提高，毕业时通过**推荐入学考试**(※7)顺利进入了宫城大学。

大学期间，积极参与面向和自己有相似经历的菲律宾孩子们的一些支援活动，以及大学的课外社团活动。今年春天将毕业走上社会。

回顾 S. H. 的支援



原来考虑在日本上大学的 S. H.，当得知自己不能考时，面临了人生的一个选择。已经从菲律宾的高中(high school)毕业的 S. H.，又再次参加日本的高中入学考试，我想这对他来说无疑是一个重大的决断。不过，考进高中开始新的生活，结识新的老师和同学，学到很多东西，也让 S. H. 学会思考，认识到生长在两个国家，掌握两种语言的自己的价值。在日本学习并掌握工作技能，为所爱的菲律宾做贡献，这也是 S. H. 将来的人生目标之一。

由于来日本，自己的生活发生了很大变化，有时还会面临意想不到的选择。而自己做出的选择又将会把自己引向何方，想起会感到不安。其实，已经在高中学习的前辈们，也有过同样的经历，他们在与至今完全不同的环境和新的人际关系中，经历了痛苦，寂寞，不理解，迷茫后，逐渐地锻炼出自己‘坚强地生活’的能力。

广泛听取不同人的意见，收集信息。发现多种可能性。遇事自己考虑，自己决定行动。自己来选择这一点似乎很重要。

事例 5 C. M. (中国出身)



C. M 中学毕业后来日。在 **MIA 日语讲座(※2)** 学习日语的同时，还在**外国人子女支援会(※3)** 支援者的辅导下进行教科书的学习。

由于英语是自己的强项，所以在选择高中时，C. M. 把重视英语教育的高中放在了考虑之中。参观了几所学校后，选择了一所校风符合自己，而且还设有国际班的县立高中，并多次去这所学校参观，让老师看到了自己日语的进步。

申请了**优惠制度(※6)** 应试，通过了英语，数学，作文和面试，顺利合格。由于性格阳光开朗，高中生活过得很充实。连学校的老师都说「自从 C. M. 来后，学校的气氛都变了」。作为学校篮球部的一员，在对外比赛中也奋力拼搏。

学习上同样用功，高中阶段继续在外人子女支援会支援者的辅导下学习，为高考做准备。

最后通过 **A0 应式(※18)** 进入东北学院大学教养学部。大学期间不仅认真学习，积极参加课外社团活动，而且还积极参加校外举行的一些论坛会并在会上踊跃发言。今年 4 月将走上社会。

回顾 C. M. 的支援



C. M 刚来日本时说自己『喜欢思考』。我想 C. M. 除喜欢思考以外，也一定同样喜欢与周围的人一起去做新的，开心的事情吧。高中时，C. M. 说，「都说『领会周围人的所想所为，言行与之合拍(用日语来说就是“读空气”)』好，但是我认为，『自己主动去制造氛围』更好」。班级讨论时，「自己说出一个提案，女生们就会说『驳回』。再说一个提案，她们还是说『驳回』」，说这些话时，C. M 虽是带着点不满情绪，但却能让我想象出当时现场热闹的气氛。

对自己有自信。对喜欢的事情就说喜欢。有一技之长。发现并展现出自己优秀的一面。
回望自己走过的路上，有着自己留下的一个个脚印。

事例 6 O. Y. (中国出身)



O. Y. 从中国的高中退学后来日本，进入私立高中学习。尽管当时日语还不怎么会说，但学习积极性非常高，高中三年期间没有休息过一天。除坚持每天预习复习外，还听取中国出身的前辈的建议，上课时有不懂的地方就主动问老师。定期考试除了国语和历史有些吃力外，数学，英语，化学，生物等学科，每次都考出了好成绩。

在校外还通过各种途径学习。先是在 **MIA 日语夜间讲座(※2)** 学日语。三期 60 次课里仅仅缺席了一次课，是因为去参加大学**对外开放日(※19)**。另外，除了在外人子女支援会(※3)的支援者辅导下学习教科外，还向「**MIA 日语支援者**」(※20)，以及在对外开放的公共空间学习时认识的一位日本先生学习日语。回顾当时，O. Y. 说，「由于那时日语的学习和教科书的学习是

同时进行的，所以很辛苦」。

O.Y. 对理科，尤其对生命科学领域很感兴趣，买来显微镜和解剖用具，把自己钓的鱼解剖观察得入了迷。毕业后的方向是进东北药科大学（现 东北医科药科大学）。在高考准备上，得到了高中老师的热心指导，O.Y. 自己也付出了很大的努力，多次在大学对外开放日时去向老师咨询，参观课堂教学。积极收集信息，最后通过**推荐入学考试**(※7) 如愿进了生命药科学科。O.Y. 说，入学前大学就要求自主学习，入学后自己花费在学习上的时间更多了，但由于是自己感兴趣的领域，感觉很充实。几乎每天都会花 12 小时以上在实验室做实验，打算毕业后进大学院继续深造，将来成为研究者。

回顾 O.Y. 的支援



O.Y. 来日本前就对生命科学感兴趣。我认为应该是意识到了『生命』。O.Y. 对他人总是尊重爱护，从未粗声暴语与人争执。也许是有一种比起周围的同学，自己年龄要大些的自我意识吧，始终不忘初心刻苦学习。高中老师也给予了很大的帮助。

要考入生命药学科学习，需要理解高中化学教科书上的日语说明及公式的意思，并有解答问题的能力。O.Y. 和其他很多孩子一样，是来日本以后才开始学习日语的，高中三年期间付出了很大努力。这不是一件简单的事情。

看着 O.Y. 的学习，让我想起了一件事。O.Y. 有一次向后辈及家长们介绍自己学习日语的经验时，打开一本笔记本给大家看。这是在学习日语的过程中，自己整理出的日语语法笔记。

O.Y. 在高中时学习也是这样，学过的地方总是认真地做成笔记。O.Y. 还给我看过大学的实验笔记。

无疑笔记的记录整理对 O.Y. 的学习有很大帮助，有助于学习的方法每个人可能都不一样，学习不会像变魔术那样瞬间就会。要找到适合自己的有效学习方法，每天学一点，持之以恒。

事例 7 U.C.（中国出身）



U.C. 15 岁时来日本，在**日语学校**(※8) 学了一个月日语后，因考虑到考高中的准备，**就降低一个学年，插班进了初中二年级**(※1)。

学校里配置有中国出身的**非常勤讲师**(※21)，可把课堂内容翻译给自己。非常勤讲师有事不能来时，就由 MIA 派遣的中国出身的**外国籍儿童支援者**(※22) 来帮助自己。跟上学习进度虽很吃力，但幸运的是有很多朋友，还加入了课外俱乐部，学校生活很开心。

在教科书的学习方面，得到了**外国人子女支援会**(※3) 支援者的辅导。

通过**推荐入学考试**(※23) 进了一所私立高中，加入了体育课外俱乐部，还参加了全国比赛。每天过的很充实。

回顾 U. C. 的支援



第一次见到 U. C. 时，还是 U. C. 刚开始学习日语的时候。那时我问「你的爱好是什么？」，「自行车」，U. C. 马上回答我。接着我又问这问那，得知 U. C. 一有时间就骑着自行车出去转。喜欢到没有去过的地方去看没有看过的景色。我问，「你将来的梦想是什么？」「运动选手。」U. C. 非常明快地回答我。

高中的课外俱乐部活动，加入了「自行车竞技部」。高中 3 年，专心致力于学习和自行车练习。U. C. 告诉我，高三的 3 月份，将去九州参加全国比赛，目前正在「为了拿到冠军，刻苦练习。」

在高中，放学后有多种课外俱乐部活动，通过参加这些活动可以结交朋友，发现新世界。

每个高中都有各种各样的课外俱乐部活动。棒球，足球等俱乐部聚集了很多自小学，中学时代就开始练习的人，多以水平高的学生为中心。如果选择日本弓道或自行车竞技这样一般中学里没有的课外俱乐部的话，可以和大家在同一起点开始。

事例 8 B. G.（蒙古国出身）



B. G. 小学 4 年级时来日本后在仙台市内的一所小学上学。这个学校外国出身的孩子很多，开有一个**国际教室**(※24)，并有专门的老师指导。B. G. 在国语，社会，理科的上课时间，就在国际教室学习日语。到了 6 年级时，日语已经可以运用自如了。

从小学开始接受**外国人子女支援会**(※3)支援者的学习辅导。上中学后，由于课外俱乐部活动很忙，曾一度中断过，初三开始准备考高中时，又开始和支援者一起学习。除此之外，还进了一家附近的**补习班**(※25)学习。

B. G. 考高中的时候，由于来日已经多年，没能享受**优惠待遇**(※6)，而是利用了**当时的推荐入学制度**(※26)顺利进入了县立高中。高中阶段，除了学习外，还参加课外俱乐部，打工等。

大学入学考试，第一年遗憾没有合格。高中毕业后，通过了**日本留学考试**(※12)第二年作为留学生考入宫城大学事业构想学部。之所以进入这个学部，是因为在高考复习阶段，通过在饮食店打工的经验，萌生了对企业经营管理的兴趣。面试时，结合打工的经历，谈了自己报考的动机。

上大学后，作为外国人子女支援会的会员，以及仙台观光国际协会的「留学生交流委员」，积极参加各种活动。

回顾 B. G. 的支援



B. G. 高中时，回忆起刚来日本的情形时说「在学校每天都处于一种紧张状态。还好，回到家里可以放松，父母没有多过问我，这可以让得以放松休息，第二天恢复精神去上学。」B. G. 的妈妈谈到当时的情况时却说，「刚来日本的时候，我也没能为孩子做什么，很对不起孩子。」看来妈妈觉得当时对不起孩子的地方，却是 B. G 为之感激之处呢。

一般来说，来日后开始学日语，到能听懂学校的讲课，大部分孩子需要花一年半到两年的时间。这段时间课堂上的学习对他们来说实际上是个空白，需要在考高中之前将其补上。B. G. 说，自己中学时期上的私塾由于是个别辅导的方式，不是统一上大课，所以能跟老师学习了以前没有学的内容。

事例 9 D. A. (尼泊尔出身)



D. A. 从小学 2 年级中途开始在日本的小学学习。当时有一位尼泊尔留学生作为**仙台市教育委员会派出的指导协力者(※27)**来帮助自己。平假名和片假名的读写很快就记住了，但由于汉字不会，就问老师后在教科书上标下读音。上中学时，虽然汉字会读了，但是国语和数学的应用题还是很吃力。

初二时，开始得到**外国人子女支援会(※3)**的辅导，以教科学习为主。每天记一定量的英语单词，做一定量的数学题，国语也是每天放声朗读一遍，就这样勤勤恳恳地坚持学习。在准备考高中的复习中，发现小学的内容还有自己没学过的地方，便又重新学习补上。

和中学的老师商量后，决定报考县立高中。志愿校决定后学习更加努力，甚至有时候天还没亮就起来学习了。

功夫不负有心人，如愿考上了理想的高中。高中阶段仍在外国人子女支援会的支援下学习。高中毕业后，由于烹调很拿手，进了一所短期大学学习营养学。校园生活很充实。

回顾 D. A. 的支援



D. A. 的进步是**靠勤勤恳恳，绝不放弃的努力**。在我看来，D. A. 从小学到初中，高中，一直都在坚持不懈地努力。现在正在学习『食物营养学』，目标是为了让患儿需要的营养通过膳食就能获取。将来的规划是开一家既能吃到尼泊尔料理，又能吃到日本料理的餐厅。

学习『食物营养学』，毕业时可以取得「营养士」「食品协调员(food coordinator) 3 级」「信息处理士」的资格。从而也可看到自己将来的方向。

事例 10 R. K.（中国出身）



R. K. 中学二年级时来日本，在仙台市内的一所中学学习，同时得到**仙台市教育委员会派遣的指导协力者（※27）**的帮助。由于指导协力者也是中国出身，对 R. K. 在语言方面给与了很大帮助。仙台市教育委员会的派遣次数用完后，这位中国出身的指导协力者又作为**MIA 外国儿童支援者（※22）**继续来校帮助自己。

另外，暑假期间，学校还请来一位日本人志愿者来校帮助自己学习日语和数学。MIA 外国儿童支援者的派遣次数用完后，这位志愿者继续来校辅导自己为考高中做准备。**优惠申请（※6）**报考的县立高中很遗憾没有合格，由于爱好制作点心，上了一家可以学习点心制作基础等技能的私立高中。时不时还会亲手做一些点心送给**外国人子女支援会（※3）**的支援者们。

高中毕业后的去向，开始是考虑进学习烹调的**专科学校（※14）**，对此还在学校**对外开放日（※19）**时去参观，收集信息。不过，在家长的建议下，最后还是决定上大学。由于成绩，特别是数学成绩优秀，通过**指定校推荐（※28）**如愿进了东北工业大学，4 月份将在该校学习设计。

回顾 R. K. 的支援



R. K. 来日本之前就有一个『开一家自己的咖啡店。』的梦想。不光甜点自己做，从店的装潢到包装都自己设计。营造一个让周围的人们来到店里就能感受到的一种轻松快乐的氛围，一个人们可以互相交流的空间。R. K. 对咖啡店经营的具体构想，也许是受了当厨师的爸爸的影响吧。

初中 3 年级在决定志愿高中时，虽然结果是上了第二志愿的学校。却让 R. K. 得到机会学习做点心。高三决定升学方向时，无论是进专科学校，还是大学，都是有希望让自己的梦想得以实现的选择。只要拥有多种可能性，即使一条路不成功还可以有别的选择。

关键词的说明

※1：降低学年

日语能力不够的学生插班进小学・中学时，根据学校的判断以及家长的要求，可以降低与年龄相应的学年入校就读。

※2：MIA 日语讲座

宫城县国际化协会（Miyagi International Association / MIA）开设的日语讲座。设有初级1・2，中级，汉字1・2，夜间初级1・2各班。夜间初级1・2的时间为每周二 18:30～20:30。

※3：外国人子女支援会

支援日语学习・教科学习的市民团体。利用放学后，周末等课外时间，主要在仙台市内的公共设施里的对外开放空间，由支援者一对一地进行学习辅导。

※4：简明日语俱乐部（さっと日本語クラブ）

青叶区中央市民中心举办的，面对中・小学生的日语讲座。时间为每周六 10:00～12:00。老师为 NPO 法人 ICAS 国际都市仙台支援市民会的成员。

※5：县立高中

宫城县的高中有公立高中（县立和市立）和私立高中（民间创办高中）。公立高中的入学金・学费等需要的费用比私立高中低。

※6：考公立高中的优惠待遇

日语能力不足的学生在考公立高中时，根据情况，有可能得到一些优惠，比如减少考试科目，延长考试时间。享受这个优惠待遇，需要通过中学事先向高中申请。不是中学在校生的考生，可由家长直接向高中申请。

※7：大学的推荐入学考试

高中期间，学业成绩优秀，在课外活动方面也取得一定程度以上的成果，得到校长推荐的学生有资格参加的入学考试。报考条件各大学不同。在一般的高考前实施，多仅通过报考申请书，论文，面试决定合格与否。但是国立公立大学，有的也要求和一般应考一样，要参加国公立大学的统考。

※8：日语学校

针对日语为非母语的人的日语民间教育机构。在日语学校学习的人通常是以「留学」在留资格来日，毕业后以进日本的大学，大学院，专科学校学习为目标的外国人。有的日语学校也招收已在日本居住的外国人。

※9：仙台日语讲座

青叶区中央市民中心和仙台观光国际协会（SenTIA）开设的面向外国人的免费日语讲座。老师由 NPO 法人 ICAS 国际都市仙台支援市民会的会员担当。

※10：在本国中学毕业后来日本，报考公立高中时所需资料

中学在校生可通过学校办理报考手续。非在校生需要自己个人提交资料，办理报考手续。首先提出报考许可申请，被批准后办理报考手续。一般情况下，需要准备以下资料：

①办理报考许可申请所需资料

- 宫城县公立高中报名许可申请表（宫城县公立高等学校出願承認願）（可从宫城县教育厅高校教育课网页下载）
- 修满 9 年学校教育课程的证明书（由最终学历的学校发行），或中学毕业水平认定考试合格的认定证明书（由文部科学省发行）的副本。
- 住民票的副本

②办理报考手续所需资料

- 报考申请表和照片贴附表（贴上宫城县收入印纸）
- 修满 9 年学校教育课程的证明书（由最终学历的学校发行），或中学毕业水平认定考试合格的认定证明书（文部科学省发行）的副本。
- 最终学历的成绩证明书或中学毕业水平认定考试调查表（文部科学省发行）的副本。
- 考生一览表（出願者一覧表）（可从宫城县教育厅高校教育课网页下载）
- 宫城县公立高中报名许可书（①的报考许可申请后由高中邮寄给本人）
- 准考证邮寄用信封（长形 3 号，写上考生姓名和地址，贴上简易挂号信快件（簡易書留速達）面值的邮票）
- 录取通知邮寄用信封（角形 2 号，写上考生姓名和地址，贴上简易挂号信快件（簡易書留速達）面值的邮票）

※11：考生高中访问

除了在特定的「校园对外开放日」开设体验入学，说明会以外，如有要求，还有很多高中，在「校园对外开放日」以外也接受报名参观。特别是在本国中学毕业后来日，还没有经历过日本的学校生活的人，最好积极去要报考的学校参观，了解学校的气氛。关于应试的问题也多向学校咨询。

※12：日本留学考试

针对希望以「外国留学生」身份进日本的大学的人实施的考试，以测试是否具有在日本的大学学习所需要的日语和基础学力水平。很多大学都要求这个考试，所考科目因大学或学部而异。

※13：函授高中

函授高中，主要是在家里利用教科书和解答书学习，平时不用去学校上课。美田园高中是县内唯一的一所公立函授高中。通过学习提交学习报告，定期到校接受面授指导，通过考试获得毕业要求的学分。

※14：专科学校

大学主要是研究学问，掌握全面知识的地方。而专科学校，主要是学习和掌握某种职业技能和知识，目的是毕业后从事一个能将学到的知识和技能立即用上的职业。

※15：为不以日语为母语的孩子和家长准备的升学指导会

每年夏天在仙台市内举办。可以听到宫城县高中应试制度的说明，高中在校生的经验介绍，还可向学校老师个别咨询。在会场可以拿到说明日本的教育制度及宫城县的高中应试制度的「升学指南」多语种版。

※16：高中毕业水平认定考试

针对因各种原因没能上高中，或中途退学的人为对象的考试。合格后承认有和高中毕业生同等程度的学力，有资格报考大学，短期大学，专科学校。

※17：高中的二次招生

通常的入学考试合格发表后，没有招满预定人员的公立高中・私立高中，有可能会实施二次招生。

※18：A0 应试

大学或学部・学科，基于各自的方针来选拔符合该校条件学生的考试制度。和推荐入学不同的是，大多不需要来自高中的推荐。考生就为什么想报考该大学，以及自己高中阶段的成果等，需要通过报考申请书及面试来积极展示。报考条件及考试内容根据大学・学部・学科而异。

※19：校园对外开放日

大学，专科学校，高中等，在周末及暑假期间实施对外开放校园，让外界了解自己的学校。在开放日这天，可以参观学校，还可以听到有关学校生活的说明。

※20：MIA 日语支援者

通过宫城县国际化协会（MIA）介绍，以一对一形式帮助日语学习的志愿者。

※21：非常勤讲师的配置

宫城县教育委员会，为了支援日语能力不够的学生，根据学校的申请，可设置辅导日语的非常勤讲师。设置时间和期间，根据情况不定。仙台市教育委员会也有同样的制度，原则上要求有教员资格的日本人担任。

※22: MIA 外国籍儿童支援者

宫城县国际化协会 (Miyagi International Association / MIA), 根据有外国籍学生就读的小・中学的申请, 派遣「外国籍儿童支援者」到学校支援日语和教科书的学习, 担当校方和学生・家长之间的翻译等。派遣次数, 与市町村的派遣制度并用, 一个学生最多 40 次。以仙台市内的学校为例, 市教育委员的「指导协力者」最多可派遣 30 次, 其余的 10 次由 MIA 派遣。

※23: 私立高中的推荐入学考试

面向以私立高中为第一志愿的考生, 通常在一般入学考试前实施的考试。宫城县内私立高中的推荐入学考试, 都是在同一天进行。报考条件和考试科目因学校不同而异, 但多有面试和作文考试。

※24: 国际教室

在外国籍学生就读人数较多的仙台市立小・中学里, 有的学校设有专职教员, 为外国籍学生设置国际教室进行日语和教科书的指导, 或进行个别指导。B.G. 当时上的国见小学, 由于居住在学区内的外国人较多, 很早以前开始就常设有国际教室。

※25: 补习班 (塾)

民间经营的, 针对小学生, 中学生, 高中生的校外补习班。在学校的时间外, 进行学校的学习内容的补习强化, 以及升学指导。

※26: 过去的推荐入学制度

宫城县的公立高中应试, 以前曾有参考初中的调查书来决定合格与否的推荐入学制度。现在已经废除了。

※27: 仙台市教育委员会的指导协力者

仙台市教育委员会, 根据学校的申请, 可以向有外国籍学生就读的仙台市内的小・中学派遣「指导协力者」。指导协力者对学生进行日语辅导等, 帮助他们学校生活的顺利进行。

除此之外, 县内的市町村, 石卷市教育委员会也向小・中学派遣支援员。另外, 其他市町村, 根据需要也有支援人才的配置。

※28: 指定校推荐

限于来自大学指定高中的推荐入学。不少私立大学有这个制度。高中根据学习成绩及课外俱乐部和其他活动的成果, 选择符合大学要求的学生推荐入学。这样由高中推荐的学生, 几乎都能合格。

对外国籍学生实施支援的团体

公益财团法人宫城县国际化协会 (MIA)
<p>为县内多文化共生的推进开展各种事业的团体。为小・中学派遣「外国籍儿童支援者」支援日语和教科书的学习，还可对外借用教材和支援者用的参考资料。接受与外国籍学生的教育，支援有关的问题咨询。另外，还开设有针对外国人的日语讲座，并可介绍一对一地支援日语学习的志愿者。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地址：仙台市青叶区体堤通雨宫町 4-17 宫城县仙台合同厅舍 7 层 ・ TEL: 022-275-3796 ・ E-mail: mail@mia-miyagi.jp
公益财团法人仙台观光国际协会 (SenTIA)
<p>开展有关仙台市内的多文化共生的地区构筑，促进接纳外国人观光游客等事业的团体。为有外国文化背景的孩子和家长，以及接收学校派遣翻译和协调员，介绍教材。还开设「暑假教室」。另外，除介绍支援日语学习的志愿者外，还和仙台市合办有日语讲座。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地址：仙台市青叶区一番町 3-3-20 东日本不动产仙台一番町大楼 6 层 ・ TEL: 022-268-6260 ・ E-mail: kokuzaika@sentia-sendai.jp
外国人子女支援会
<p>利用放学后及周末时间，在公共设施的对外开放空间个别辅导外国人子女的日语和教科。学习的星期和时间商量后决定。另外，还举办孩子，家长，支援者交流会。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ TEL: 090-2793-8899 ・ E-mail: jets@sda.att.ne.jp Tadokoro12@yahoo.co.jp
NPO 法人 ICAS（アイカス）国际都市仙台市民支援会
<p>青叶区中央市民中心主办的针对外国来的小・中学生的日语讲座「さっと日本語クラブ」（简明日语俱乐部）。还同时开设有针对成人的日语讲座。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ E-mail: npo.icas@gmail.com <p>◎さっと日本語クラブ（简明日语俱乐部）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地址：青叶区中央市民中心（仙台市青叶区一番町 2-1-4） ・ 时间：每周六 10:00～12:00 ・ 问询：TEL 022-223-2516
瀛华中文学校
<p>主要以孩子为对象的中文教室。由中国出身的人教。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地址：エスポール宮城（宫城县青年会馆）（仙台市宫城野区幸町 4-5-1） ・ 时间：每周日 10:00～12:00 ・ 问询：TEL 022-293-4631
韩国语学校宫城（ハングル学校宮城）
<p>在日大韩国民团宫城县地方支部（民团宫城）为有韩国文化背景的孩子举办的韩国语・韩国文化教室。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地址：韩国会馆（仙台市青叶区本町 1-5-34） ・ 时间：周六 13:00～17:00（一年 25 次） ・ 问询：TEL 022-263-6961（星期一～星期五）

「외국국적 아동·청소년 서포트 사례집 ~다문화 아이들의 밝은 미래를 위해~」

머리말

미야기현의 거주외국인이 증가하게 됨에 따라 학교에도 다양한 다문화적 배경을 지닌 학생들이 점차 증가하고 있습니다.

다문화가정의 자녀들은 언어와 습관의 차이로 학교공부에 어려움을 겪거나 외톨이가 되는 등 어려운 상황에 놓이기가 쉽습니다.

이러한 상황속에서도 지금까지 지도교사를 비롯하여 교육위원회와 각종 단체의 지원을 받으면서 노력을 거듭해 온 결과 많은 어려움을 극복하고 고등학교 진학과 그후의 진로를 결정한 학생들도 많이 있습니다.

이 책은 지금은 사회인으로서, 또는 「후배」를 응원하는 입장으로, 사회 구성원의 일원인 「선배」가 어떤 지원제도를 활용해서 각자의 길을 걸어왔는가를 정리한 사례집입니다.

외국인 학생과 보호자, 또 학생을 지도하는 지도교사가 학생의 미래를 위해서 어떠한 단계를 밟아가면 좋을지 등을 검토하는 자료로서 이 책이 활용되었으면 하는 바람입니다.

2019 년 3 월

공익재단법인 미야기현국제화협회(MIA)

책 소개

본서는 미야기현에 사는 10 명의 외국국적 아동·청소년의 사례 모음집입니다. 각각의 아동·청소년들이 학교 안팎에서 어떠한 지원제도를 활용하여 자신의 목표를 이루어 갔는가를 소개하고 있습니다. 각 사례 안에 적혀있는 키워드(번호를 붙여서 굵게 표시를 했습니다)의 설명은 모든 사례 내용의 뒷부분에 모아두었습니다.

또한, 각 사례 뒤에는 「외국인 어린이 지원의 모임」의 대표인 다도코로 씨가 아이들을 지원하면서 느낀 코멘트를 게재했습니다. 다도코로 씨 코멘트 안에도 아이들의 미래를 열어갈 수 있는 힌트가 많이 있다고 봅니다.

권말에는 외국국적 아동·청소년들을 지원하는 단체를 소개해 두었습니다.

사례 1 0.S.군(중국 출신)



0.S.군은 일본에 와서 자신의 나이보다 **한 학년을 낮춰서 중학교 2 학년으로 편입했습니다**(※1). 중학교를 다니면서 **MIA 일본어 야간강좌**(※2)에도 다니며 일본어 공부를 계속했습니다. 또 **외국인 어린이 지원의 모임**(※3)의 서포터의 도움을 받으면서 학교공부도 했습니다. 그리고 토요일에는 **삿토 일본어 클럽**(さっと日本語クラブ)(※4)에도 다녔습니다.

고등학교 진학은 보호자가 학교 및 교육위원회와 상담을 해서 **현립고등학교**(※5)의 시험을 보기로 했습니다. 학교에 **배려신청**(※6)을 해서 사회와 이과, 국어는 별실에서 시험시간을 연장해서 보고, 영어와 수학도 별실에서 시험을 봤습니다. 그리고 작문시험과 면접도 봤습니다.

고등학교에 입학한 후에도 학교공부를 따라가는 것이 처음에는 많이 힘들었지만 모르는 내용은 쉬는 시간과 방과후에 적극적으로 선생님께 질문을 했습니다. 당시를 회상하면서 0.S.군은 「학생이 모르는 것을 교사가 가르쳐 주는 것은 당연한 거니까 창피하게 여기지 않고 적극적으로 물어봤다」라고 합니다. 어떤 선생님은 교과서에 일본어한자 발음을 적어주시기도 하셔서 정말 많이 도움이 되었다고 합니다. 또 「외국인 어린이 지원의 모임」의 서포터와 같이 계속 공부를 했습니다.

그는 고등학교에서 좋은 성적을 받아 **추천입시**(※7)를 통해 미야기대학 사업구상학부에 진학해서 건축공부를 했습니다. 대학생이 되어서는 비슷한 입장에 놓여있는 외국출신의 후배들을 도와주기 위해 힘썼습니다.

대학을 졸업한 후에는 건설회사에 취직을 해서 사회인으로서 바쁜 나날을 보내고 있습니다.

0.S.군 지원 코멘트



0.S.군은 단순히 노력만 해서는 좋은 결과를 얻을 수 없다는 것, 목표를 달성하기 위해서 무엇을 해야하는 가를 생각하고 강한 의지를 갖고 노력해야 한다는 것을 알고 있었습니다. 일본의 대학에 유학한 경험이 있는 숙모로부터 조언도 받았습니다. 그리고 당시에는 중학교 선생님이 「배려신청」이라는 제도를 모르고 계셔서 0.S.군의 아버님이 미야기현교육위원회에 가셔서 상담을 하시고 그 내용을 중학교 선생님께 알려드렸습니다. 학부모의 적극적인 관심이 0.S.군에게 힘이 되었습니다.

대학에 입학하고 나서는 대학을 졸업하면 2 급건축사 시험 보기, 취업은 1 급건축사 공부를 계속 할 수 있는 곳을 선택하기 라는 구체적인 계획을 세우고 공부했습니다. 지금도 직장을 다니면서 꿈을 이루기 위해 공부를 계속하고 있습니다.

사례 2 K.T.군(한국 출신)



K.T.군은 한국에서 중학교를 졸업하고 16 살에 일본에 왔습니다. 센다이에 있는 사설 **일본어학교**(※8)와 **센다이 일본어강좌**(※9), **MIA 일본어강좌**(※2)에 다니면서 일본어를 집중적으로 배웠습니다. 그리고 **외국인 어린이 지원의 모임**(※3)의 서포터의 도움을 받아 수학과 영어도 공부했습니다. 미야기현 고교교육과에 **모국의 중학교를 졸업하고 일본에 온 학생이 공립고등학교에 진학하기 위해 필요한 절차 등을 확인하면서** (※10) 진학하고 싶은 고등학교를 정했습니다.

지망학교에는 수험상담을 위해 몇차례 방문했습니다(※11). 두 번째 방문 때는 처음 방문 때보다 일본어 실력이 늘었기에 그동안의 노력과 향상된 모습을 선생님들께 보여줄 수 있는 기회도 되었습니다.

10월에 일본에 와서 다음해 3월에 시험을 봤습니다. **배려신청**(※6)을 해서 시험은 수학, 영어(수학, 영어 시험시간은 각각 10 분 씩 연장), 작문시험과 면접을 보고 무사히 지원한 고등학교에 합격했습니다. 고등학교에 들어가서도 외국인 어린이 지원의 모임의 서포터의 도움을 받으면서 학교공부를 했습니다.

K.T.군은 대학에 진학할 때 일반적인 방법과는 다른 방법을 선택했습니다. 일본에서 그대로 고등학교를 졸업한 것이 아니라 고등학교 재학 도중 한국에 돌아가 한국의 고등학교 졸업인정 검정고시에 합격하고 그 후 **일본유학시험**(※12)을 치르고 유학생으로서 미야기대학에 입학했습니다.

대학 재학중에 두 번의 미국유학 경험을 통해 영어실력을 쌓은 K.T.군은 취업이 결정돼서 금년 봄부터 직장인이 됩니다.

K.T.군 지원 코멘트



모국의 중학교를 졸업한 후에 일본에 온 학생이 「배려신청」을 할 경우에는 자신의 장래 희망, 고등학교에서 무엇을 하고 싶은가, 그리고 입학 후에는 학교수업과 일본어 공부를 열심히 하겠다는 것을 고등학교 선생님께 말씀을 드려서, 3 년간의 고교생활을 잘 보낼 수 있다는 것을 알게 하는 것이 중요합니다.

고등학교 입학 후 K.T.군은 한국과 일본의 학교생활과 친구를 사귀는 방법 등이 다른 것에 어려움을 느낀 적도 있었지만 점차 익숙해져 갔습니다. K.T.군이 일본에 온 지 얼마 안 된 후배들에게 이야기한 내용입니다. 「친구를 만들려면 주위사람들을 잘 관찰해 보세요. ‘이 친구는 괜찮은 친구인 것 같다’ 라고 생각이 들면 그 친구를 따라해 보면 좋아요. 하지만 절대 잊으면 안 되는 것은 자신답지 않는 것은 절대 따라하지 마세요.」

사례 3 S.S.군(중국 출신)



S.S.군은 중학교 졸업 후 일본에 왔고, **MIA 일본어강좌**(※2)에서 일본어를 공부한 후 **통신제고등학교**(※13)에 진학했습니다. 통신제고등학교는 학교에 레포트 제출을 중심으로 수업진도를 나가는 외에 스쿨링(출석수업)과 시험을 쳐서 단위를 취득해야 합니다. 학교에 제출해야 하는 레포트는 **외국인 어린이 지원의 모임**(※3)의 서포터의 도움을 받으면서 같이 작성을 했습니다. 시험문제는 레포트 안에서 나오기 때문에 레포트 준비를 잘하면 확실하게 단위를 취득할 수 있습니다. 또한 모르는 것은 스쿨링이 있을 때 학교 선생님께서 열심히 지도해 주셨습니다.

S.S.군은 자동차 정비에 관심이 있었기 때문에 고등학교 졸업 후에는 자동차 정비를 배울 수 있는 **전문학교**(※14)에 들어갔습니다. 현재는 자동차제조회사 계열의 정비공장에서 일하고 있습니다.

S.S.군 지원 코멘트



S.S.군은 중국 흑룡강성 출신으로 고향에 일본의 T 회사의 자동차 제조공장이 있었습니다. 고등학교 졸업 후의 진로로 자동차정비전문학교에서 기술을 배운 뒤 T 회사의 자동차를 정비하고 싶다는 희망을 갖고 있었습니다. 그 이야기를 들은 아버지가 전문학교 입시 수속을 도와주셨습니다. 그리고 고등학교 선생님도 공부를 도와주셨습니다.

고등학교 선생님은 학생이 진로 희망을 결정하면 그것을 이룰 수 있도록 공부면에서도 진로지도면에서도 지원을 해주십니다. 반대로 학생이 무엇을 하고 싶은지 결정을 내리지 못하면 진로지도를 해주기 어렵습니다.

사례 4 S.H.양(일본 / 필리핀 출신)



S.H.양은 일본에서 태어났습니다. 그리고 약 8 년동안 일본에서 살다가 가족과 함께 필리핀으로 이주를 했습니다. 초등학교 6 년과 하이스쿨 4 년이라는 당시 필리핀의 일반적인 교육과정을 마치고 16 살에 일본으로 돌아왔습니다. 필리핀에서는 대학에 진학할 수 있는 나이이지만, 일본의 제도상으로는 중등교육의 년수가 2 년이 모자란 관계로 대학에 진학할 수가 없었습니다. 그리고 필리핀에 살면서 일본어 공부를 조금씩 하기는 했지만 대부분 잊어버렸습니다.

S.H. 양의 아버님이 **일본어가 모어가 아닌 아이들과 부모님을 위한 진로가이드스(※15)**에 참석하신 것이 계기가 되어 **외국인 어린이 지원의 모임(※3)**의 도움을 받게 되었습니다. 서포터와 같이 수학, 영어, 작문, 한자 등의 공부를 열심히 했습니다. 그리고 **센다이 일본어강좌(※9)**에서도 일본어를 배웠습니다.

처음에는 **전문학교(※14)**나 **고등학교졸업정도 인정시험(※16)**을 치른 후, 대학진학 또는 취직을 생각했었는데 실제로 고등학교를 방문해 보고 수업과 부활동 하는 모습을 견학하면서 고등학교에 진학하기로 생각을 바꿨습니다.

먼저 집에서 가까운 현립고등학교를 지원해서 시험을 봤는데 불합격했기 때문에 **2 차 모집 (※17)**을 하고 있던 다른 현립고등학교의 시험을 보고 합격했습니다. 두 곳 모두 **배려신청 (※6)**을 해서 영어, 수학, 작문, 면접시험만 보았습니다.

합격한 고등학교는 국제이해교육을 적극적으로 채택을 하고 있는 학교로서 이문화와 영어에 관심이 많은 학생들이 많았습니다. 이것은 S.H. 양에게 있어서 좋은 기회였습니다. 학교수업과 부활동을 통해서 S.H. 양 자신도 글로벌한 시점으로 사물을 바라보고 생각하게 되었습니다. 공부도 꾸준히 열심히 했기 때문에 학교성적도 점점 좋아져서 **추천입시(※7)**로 미야기대학에 진학했습니다.

대학에 들어가서는 자신과 비슷한 입장의 필리핀 아이들을 서포트하는 활동과 대학의 동아리활동도 적극적으로 참여했습니다. 올해 봄부터 사회인이 될 예정입니다.

S.H. 양 지원 코멘트



S.H. 양은 일본에서 대학을 다닐려고 했는데 진학할 수 없다는 것을 알았을 때 인생의 기로에 서게 되었습니다. 필리핀의 하이스쿨을 졸업한 자신이 다시 일본에서 고등학교를 다니기로 한 것은 아주 큰 결단이었다고 생각합니다. 그러나 그 결단 후 새로운 고등학교 생활을 통해 선생님과 친구들을 만나고 많은 것을 배우고 생각하게 되었습니다. 그리고 자신이 두 나라에서 살면서 두 나라의 언어를 말할 수 있다라는 가치를 발견했습니다. 일본에서 학문과 일의 기술을 배우고 그것을 자신이 좋아하는 필리핀을 위해서 사용하는 것이 장래 계획의 하나가 되었습니다.

일본에 살게 됨으로써 생활이 바뀌고 예상치 못한 일로 인생의 기로에 서게 되는 일이 있습니다. 자신이 선택한 길 끝에 어떤 미래가 기다리고 있는지를 생각하면 불안합니다. 고등학생이 된 선배들을 보면 지금까지와는 완전히 다른 환경과 새로운 인간관계 속에서 괴로운 마음, 외로움, 납득하기 힘든 마음과 갈등을 겪으면서 조금씩 ‘강인하게 살아가는 힘’을 스스로 길러왔다는 것을 알 수 있습니다. 여러사람들의 이야기를 듣고 정보를 모으기, 선택지를 하나만이 아니라 다양하게 찾아보기, 스스로 생각하고 자신의 행동을 선택하기, 스스로 선택하는 것이 대단히 중요한 것 같습니다.

사례 5 C.M.군(중국 출신)



C.M.군은 중학교 졸업 후 일본에 왔습니다. **MIA 일본어강좌(※2)**에서 일본어를 배우면서 **외국인 어린이 지원의 모임(※3)**의 도움을 받아 학교공부도 했습니다.

C.M.군은 영어를 잘하기 때문에 영어교육에 힘쓰고 있는 고등학교에 진학하고 싶다고 생각했습니다. 여러 학교를 견학해본 결과 학교 분위기가 마음에 들어서 국제코스가 있는 현립고등학교를 지망했습니다. 동 고등학교를 여러차례 견학하면서 선생님들에게 그때마다 향상된 일본어 실력을 보여주는 시간이 되기도 했습니다.

수험시에는 **배려신청(※6)**을 해서 영어, 수학, 작문, 면접시험을 보고 무사히 합격했습니다. 그리고 타고난 활발한 성격으로 친구들과도 잘 어울려 알차게 고등학교 생활을 보낼 수가 있었습니다. 학교 선생님들이 「C.M.군이 오고나서 학교 분위기가 바뀌었다」라고 말씀하실 정도였습니다. 부활동으로는 농구부에 들어가서 다른 학교팀과의 시합에서도 최선을 다해 경기를 했습니다.

학교공부도 외국인 어린이 지원의 모임의 지도를 계속 받으면서 대학진학을 위해 열심히 공부했습니다.

대학은 **AO 입시(※18)**로 동북학원대학 교양학부에 진학했습니다. 재학중에는 학과공부와 동아리 활동에도 열심히 임했을 뿐만 아니라 학외에서 개최하는 심포지움 등에도 적극적으로 참가, 발표를 하는 등 자신의 생각을 적극적으로 펼치는 활동도 했습니다. 4월부터 사회인이 됩니다.

C.M.군 지원 코멘트



C.M.군은 처음 일본에 왔을 때 『생각하는 것을 좋아해요.』라고 말했습니다. 그는 생각하는 것을 좋아하는 것 못지않게 주위 사람들과 같이 새로운 것, 즐거운 것을 하는 것도 좋아하지 않을까라고 생각했습니다. C.M.군이 고등학생 때 이런 이야기를 했었습니다. 「다들 『분위기 파악』을 잘하는 것이 좋다고 말하지만, 저는 『분위기 만드는 것』을 좋아해요」 교실에서 친구들과 이야기할 때, 「제가 제안을 하면 여자아이들이 『각하(기각)』라고 해요. 그래서 다른 제안을 하면 또 『각하(기각)』라고 말해요」라고 불만스럽다는 듯이 말은 했지만 분명 즐거운 시간이었음을 짐작할 수 있었습니다.

자신을 갖는 것, 좋아하는 것을 좋아한다라고 이야기 할 수 있는 것, 특기를 갖고 있는 것, 그런 자기 안의 등대의 불빛을 빛나게 하세요. 돌아보면 뒤에 자신이 걸어온 발자취가 또렷이 남아 있습니다.

사례 6 0.Y.군(중국 출신)



0.Y.군은 중국에서 다니고 있던 고등학교를 중퇴하고 일본에 와서 사립고등학교에 입학했습니다. 그때는 일본어를 잘하지 못했지만 학습의욕이 대단히 높아 고등학교 3년동안 결석한 적이 없었습니다. 매일 예습·복습도 꼬박꼬박하고 같은 중국 출신 선배의 조언대로 수업시간에 이해가 안 되는 부분은 적극적으로 선생님께 질문도 했습니다. 정기 테스트에서 국어와 역사는 고생을 좀 했지만 수학, 영어, 화학, 생물 등은 매번 성적이 좋았습니다.

그는 학교 밖에서도 다양한 방법으로 공부를 했습니다. 먼저 **MIA 일본어강좌**(※2) 수업을 들었습니다. 3학기 총 60회 수업 중 결석한 날은 대학교 **오픈캠퍼스**(※19) 일정과 수업이 겹친 단 하루뿐이었습니다. 또한 **외국인 어린이 지원의 모임**(※3)의 서포터와 학교공부를 하는 것 외에도 **MIA 일본어 서포터**(※20), 그리고 공공시설의 개방장소에서 자습하던 중 알게 된 일본인 남성분에게도 일본어를 배웠습니다. 0.Y.군은 당시를 되돌아 보면서 「일본어공부와 학교공부를 동시에 시작했어야 했기때문에 힘들었었다」라고 말했습니다.

이과, 특히 생명과학분야에 관심이 많아서 현미경과 해부용 도구를 구입하여 자신이 낚시를 해서 잡은 물고기를 해부하고 관찰하는 것도 좋아했습니다. 고등학교를 졸업하면 도호쿠약과대학 (현:도호쿠의과약과대학)에 들어가고 싶었습니다. 희망 대학에 진학할 수 있도록 고등학교 선생님께서 열심히 학습지도를 해주셨을 뿐만 아니라 동 대학의 오픈캠퍼스 에도 여러차례 출석을 하거나 대학 교수님께 상담하러 가서 강의를 견학하는 등 적극적인 정보수집을 한 결과 생명약학과에 **추천입시**(※7)로 입학할 수 있었습니다. 도호쿠약과대학은 입학 전부터 자주적인 학습을 했어야 했고 입학하고 나서는 더 많은 공부시간이 필요했지만 자신이 공부하고 싶은 분야였기 때문에 아주 만족스럽다라고 말했습니다. 그는 매일 거의 12 시간 이상을 연구실에서 실험을 하고 있습니다. 장래에 연구자가 되는 것이 꿈인 0.Y.군은 대학원에 진학할 예정입니다.

0.Y.군 지원 코멘트



0.Y.군은 일본에 오기 전부터 생명과학에 관심을 가지고 있었습니다. 『생명』을 의식하고 있었다고 생각합니다. 다른사람을 언제나 소중히 여기고, 화를 내거나 다툰 적이 없었습니다. 아마 주위의 학급 친구들보다 자신이 나이가 많다는 것을 의식하고 있었기 때문일지도 모릅니다. 처음에 마음 먹은 것을 이루기 위해 끈기있게 공부를 했습니다. 고등학교 선생님들도 응원을 해주셨습니다.

생명약학과에 진학하기 위해서는 고등학교 화학교과서의 일본어로 된 설명과 공식의 의미를 이해하고 문제를 풀 수 있어야 합니다. 0.Y.군도 대부분의 학생들처럼 일본에 와서 일본어를 배웠기 때문에 고등학교 3년동안 피나는 노력을 했습니다. 분명히 결코 쉽지만은 않았을 것입니다.

0.Y. 군의 공부를 지도하면서 생각난 것이 있습니다. 후배들과 보호자에게 일본어를 어떻게 공부했는가 이야기를 나누는 시간이 있었습니다. 그때 한 권의 노트를 펴서

모두에게 보여주었습니다. 일본어를 공부하면서 문법을 정리한 노트였습니다. 고등학교 수업시간에 배운 내용도 깨끗하게 정리해서 노트를 만들었습니다. 대학생이 된 후의 실험노트도 보여 주었습니다.

0.Y.군의 경우는 노트정리가 학습에 많은 도움이 되었습니다. 아마 학습능률을 올리는 공부방법은 사람마다 다르다고 생각합니다. 공부는 마법처럼 저절로 되는 것이 아닙니다. 자신의 공부방법을 잘 찾아서 매일 조금씩 계속해 보세요.

사례 7 U.C.군(중국 출신)



U.C.군은 15 살에 일본에 왔습니다. **일본어학교(※8)**를 1 개월간 다닌 후 고등학교 진학준비를 위해 **자신의 나이보다 한 학년을 낮추어서 중학교 2 학년으로 편입했습니다 (※1).**

학교에는 중국 출신의 **비상근 강사(※21)**가 배치되어 있어서 수업 통역 등의 지원을 해주었습니다. 비상근 강사가 사정이 생겨 도와줄 수 없을 때에는 다른 중국 출신자가 **MIA 외국국적 어린이 서포터(※22)**로서 학교에 와주었습니다. 수업을 따라가는 것은 힘들었지만 친구들도 많이 생겼고 부활동도 하면서 즐겁게 학교생활을 보냈습니다.

외국인 어린이 지원의 모임(※3)의 지원도 받아 주로 학교공부를 서포터와 같이 했습니다.

추천입시(※23)로 사립고등학교에 입학하고 운동부의 부활동으로 전국대회에 출전하는 등 충실한 나날을 보내고 있습니다.

U.C.군 지원 코멘트



처음 U.C.군을 만났을 때는 이제 막 일본어를 배우기 시작했을 때였습니다. 제가 「월 좋아해요?」라고 물으니 바로 「자전거」라고 대답했습니다. 여러가지를 물어보면서 알게 된 것은 시간이 날 때 자전거를 타고 낚시 장소에 가서 지금까지 본 적이 없는 풍경을 바라보는 것을 좋아한다는 것을 알았습니다. 「장래 꿈은 뭐예요?」라고 물으니 「스포츠 선수」라고 명쾌하게 대답했습니다.

고등학교에서는 부활동으로 「자전거 경기부」에 들어가서 3 년간 학업과 자전거에 열정을 쏟아부었습니다. 3 학년 3 월에는 규슈에서 열리는 전국대회에 출장한다고 합니다. 「우승을 목표로 열심히 연습하고 있습니다」라고 했습니다.

고등학교에서는 수업이 끝나고 나면 방과 후에 부활동을 하면서 새로운 세계와 친구들을 만들 수가 있습니다. 고등학교마다 찾아보면 다양한 부활동이 있습니다. 야구와 축구 등 초·중학교에서도 계속 해온 학생들이 모인 부활동은 실력이 좋은 학생이 중심이 됩니다. 양궁이나 U.C.군이 들어간 자전거 경기부 등 중학교에는 없는 부활동을 선택하면 다른 친구들과 같은 조건에서 시작할 수가 있습니다.

사례 8 B.G.군(몽골 출신)



B.G.군은 초등학교 4 학년 때 일본에 와서 센다이시 소재의 초등학교에 입학했습니다. 이 초등학교는 외국출신의 아동들이 많고 전임교사가 지도를 하는 **국제교실**(※24)이 있기 때문에 B.G.군도 국어, 사회, 이과 수업시간에는 국제교실에서 공부를 했습니다. 6 학년이 되었을 때에는 일본어로 말을 주고받는 것에 전혀 문제가 없었습니다.

외국인 어린이 지원의 모임(※3)의 지도 도움을 초등학교 때부터 받았지만 중학교에 진학하고 나서는 부활동 등으로 바빠져서 일단 지도받는 것을 중단했습니다. 그러나 3 학년이 되어 고등학교 입시준비를 하게 되면서 다시 지도를 받기 시작했습니다. 그리고 집 근처에 있는 **주쿠**(※25)에도 다녔습니다.

B.G.군이 고등학교 입시를 치를 때에는 일본에 온 지 꽤 시간이 지난 후였기 때문에 **배려신청**(※6)은 할 수 없었지만, **당시에 있었던 추천입시제도**(※26)로 현립고등학교에 합격했습니다. 고등학생 때에는 공부뿐만 아니라 부활동과 아르바이트 등 다양한 경험도 했습니다.

대학 입학시험은 일반전형으로 지원을 했는데 안타깝게도 불합격이었습니다. 그래서 고등학교를 졸업하고 나서 **일본유학시험**(※12)을 보고 1년 뒤에 유학생으로서 미야기대학 사업구상학부에 입학했습니다. 이 학부를 지원한 이유는 재수하면서 음식점에서 아르바이트를 했었는데 그때 기업의 경영 매니지먼트에 관심이 생겼기 때문입니다. 대학교 면접 때에도 아르바이트를 했던 경험을 바탕으로 지망 동기에 대한 설명을 했습니다.

대학생이 되어서는 「외국인 어린이 지원의 모임」의 회원과 센다이관광국제협회의 「유학생 교류위원」이 되어 적극적인 활동을 하고 있습니다.

B.G.군 지원 코멘트



B.G.군은 고등학생 때, 자신이 처음 일본에 왔었던 때를 돌아보면서 「학교에서 긴장을 하고 매일 스트레스를 받고 집에 돌아오면 부모님이 폭 설 수 있도록 배려해 주셨어요. 집에서 잘 쉬고나면 다음날 힘을 내서 학교에 갈 수 있었어요」라고 했습니다. 한편 어머니는 「처음 일본에 왔었을 당시에는 아이를 위해 해줄 수 있는 것이 아무것도 없어서 많이 안타까웠어요.」라고 하셨습니다. 어머니께서 마음 아파하시며 돌봐 주시는 것을 B.G.군은 감사하게 생각했습니다.

일본에 와서 일본어를 배우기 시작해서 학교 수업내용을 듣고 이해하게 되기까지는 대부분의 학생이 1 년반~2 년이 걸립니다. 이 기간동안에는 수업내용을 잘 이해하지 못하기 때문에 고등학교 입시때까지 꾸준히 공부할 필요가 있습니다. B.G.군은 중학생 때 다녔던 주쿠가 수업형식이 아니라 개별적으로 질문에 답해주는 형태의 학원이었기 때문에 학습이 안 된 부분을 지도받을 수 있었다고 합니다.

사례 9 D.A.양(네팔 출신)



D.A.양은 일본의 초등학교를 2학년 중간부터 다녔습니다. **센다이시교육위원회가 지도협력자(※27)**로서 학교에 파견한 네팔인 유학생이 학습지도를 해주었습니다. 히라가나 가타가나를 쓰고 읽는 것은 비교적 빨리 마스터했지만 한자를 몰랐기 때문에 선생님께 여쭙보면서 교과서에 한자 읽기발음을 적었습니다. 중학교에 입학할 즈음에는 한자도 읽을 수 있게 되었지만 국어와 수학의 문장식 질문 문제는 많이 어려웠습니다.

중학교 2학년 때에는 **외국인 어린이 지원의 모임(※3)**의 지도를 받기 시작했는데 주로 학교공부 중심으로 지도를 받았습니다. 영단어를 매일 정해진 분량 암기하기, 수학문제도 매일 조금씩 풀기, 국어는 매일 1번씩 큰 소리로 읽기 등 꾸준히 걸르지 않고 공부했습니다. 고등학교 입시준비를 하고 있을 때, 초등학교 내용중에서 제대로 이해하지 못한 부분이 있는 것을 발견하고 기초부터 다시 배우기도 하였습니다.

고등학교는 중학교 선생님과 의논을 해서 현립고등학교를 응시하기로 했습니다. 지망학교를 정한 후에는 더욱 학업에 매진하여 때로는 밤이 쉼때까지 공부를 한 적도 있었습니다.

그 노력의 결과로 무사히 지망 학교에 합격했습니다. 고등학교 진학 후에도 외국인 어린이 지원의 모임의 서포터와 공부를 계속했습니다. 고등학교 졸업 후에는 요리를 좋아하니까 영양학을 배울 수 있는 단기대학에 입학해서 캠퍼스 라이프를 즐기고 있습니다.

D.A.양 지원 코멘트



D.A.양은 **결코 포기하지 않고 꾸준히 실력을 키워왔습니다.** 초등학교, 중학교, 고등학교를 다니는 동안에도 꾸준히 노력했을거라고 생각합니다. 현재는 『식물(食物)영양학』을 공부하고 있고, 병에 걸린 아이들이 필요한 영양분을 식사를 통해서 섭취할 수 있도록 하는 것을 목표로 하고 있습니다. 그리고 장래에는 네팔요리와 일본요리를 둘 다 즐길 수 있는 가게를 열고 싶다는 계획을 갖고 있습니다.

『식물(食物)영양학』을 공부함으로써 졸업과 동시에 「영양사」 「푸드 코디네이터 3급」 「정보처리사」 자격을 받을 수 있기때문에 목표 진로도 구체적으로 보입니다.

사례 10 R.K.양(중국 출신)



R.K.양은 중학교 2학년 때 일본에 왔습니다. 센다이시 소재의 공립중학교에 다니면서 **센다이시교육위원회가 파견한 지도협력자(※27)**의 지원을 받았습니다. 지도협력자는 중국 출신이었기 때문에 언어적인 부분에서 많은 도움을 받을 수 있었습니다. 센다이시교육위원회의 파견 횟수가 종료된 후에는 같은 사람이 **MIA 외국국적 어린이 서포터(※22)**로서 학교에 왔습니다.

또 학교로부터 의뢰를 받은 일본인 자원봉사자가 여름방학 기간중에 학교에 오셔서 주로 일본어와 수학을 지도해 주셨습니다. MIA 외국국적 어린이 서포터의 파견 횟수가 종료된 후에도, 학교에서 일본인 자원봉사자의 지도를 계속 받으면서 고등학교 시험준비를 했습니다. **배려신청(※6)**을 해서 시험을 본 현립고등학교는 안타깝게도 불합격했지만 좋아하는 제과기술의 기초 등의 기능을 배울 수 있는 사립고등학교에 진학을 할 수 있었습니다. **외국인 어린이 지원의 모임(※3)**의 서포터에게 때때로 과자를 만들어 선물을 하기도 했습니다.

고등학교 졸업 후의 진로로서 처음에는 조리를 배우는 **전문학교(※14)**에 진학하고 싶어서 **오픈캠퍼스(※19)**에 참가하는 등 전문학교에 대한 정보를 모았지만 보호자의 조언에 따라 대학교 진학으로 목표를 바꿨습니다. 자신있는 수학을 비롯해 다른 과목도 성적이 좋았기 때문에 **지정교추천(※28)**으로 도호쿠공업대학에 멋지게 합격했습니다. 4월부터 동대학에서 디자인 공부를 할 예정입니다.

R.K.양 지원 코멘트



R.K.양은 일본에 오기 전부터 『자신의 카페를 열고 싶다』라는 꿈을 가지고 있었습니다. 가게 인테리어를 디자인하고 디저트도 만들고 포장 케이스도 자신이 고안하고 싶어했습니다. 카페를 찾는 고객들이 즐거운 휴식을 취하며 좋은 만남을 이룰 수 있는 공간을 자신의 손으로 만들어 보고 싶다고 합니다. 중국요리사인 아버지를 보면서 가게 경영을 구체적으로 그려볼 수 있었는지도 모릅니다.

중학교 3학년 때 진학할 고등학교를 정했는데, 제 2 지망 고등학교에 진학하게 되었지만 거기서 R.K.양은 제과관련 기능을 배울 수 있었습니다. 그리고 고등학교 3학년이 되어서 진로를 정할 때, 전문학교와 대학교 모두 자신의 꿈을 실현시킬 수 있는 선택지가 있었습니다. **선택지를 여러개 준비해 두면 하나가 잘 안되어도 다른 길을 찾을 수가 있습니다.**

키워드 설명

※1: 학년을 낮추어서 재적

일본어가 서툰 아동·청소년이 초·중학교에 편입할 경우, 학교의 판단과 보호자의 희망에 따라 학생의 나이보다 어린 연령대의 학년에 편입시키는 경우가 있습니다.

※2: MIA 일본어 강좌

미야기현국제화협회(Miyagi International Association / MIA)가 운영하고 있는 일본어 강좌입니다. 초급 1·2, 중급, 한자 1·2, 야간 초급 1·2 반이 있습니다. 야간 초급 1·2는 매주 화요일 18:30~20:30에 수업이 있습니다.

※3: 외국인 어린이 지원의 모임

일본어 학습·교과학습의 지원을 해주고 있는 시민단체입니다. 방과 후와 주말 등 학교 수업시간 외에 주로 샌다이 소재의 공공기관 안에 마련되어 있는 개방장소에서 서포터(도우미)가 일대일로 외국인 아동·청소년을 도와주고 있습니다.

※4: 삿토 일본어 클럽 (さっと日本語クラブ)

아오바쿠 중앙시민센터가 운영하는 초·중학생을 위한 일본어 강좌입니다. 매주 토요일 10:00~12:00에 수업이 있습니다. 지도 선생님은 NPO 법인 ICAS 국제도시 샌다이를 지원하는 시민모임의 회원입니다.

※5: 현립고등학교

미야기현의 고등학교는 공립고등학교(현과 시가 설립한 고등학교)와 사립고등학교(민간인이 설립한 고등학교)가 있습니다. 공립학교가 사립학교보다 입학·통학에 드는 비용이 저렴합니다.

※6: 공립고등학교 입학시험을 볼 경우의 배려

일본어가 능숙하지 않는 학생이 공립고등학교 입학시험을 볼 경우, 시험과목을 줄이거나 시험시간을 연장하는 등의 「배려」를 받을 수가 있습니다. 배려를 받으려면 미리 중학교가 고등학교에 신청을 해야합니다. 중학교에 재학중이지 않는 학생의 경우는 보호자가 고등학교에 신청할 수도 있습니다.

※7: 대학의 추천입시

고등학교 재학중의 학업 성적과 과외활동에서의 활약 등 일정 이상의 성과를 내고, 학교장으로부터 추천을 받은 학생이 볼 수 있는 시험입니다. 원서제출 조건은 대학에 따라 다릅니다. 일반 입시보다 빨리 전형이 이루어지고 지원서류, 논문, 면접을 통해 합격자를 결정하는 경우가 많습니다. 국공립대학의 경우는 일반입시처럼 국공립대학 공통시험으로 선발하는 경우도 있습니다.

※8: 일본어학교

일본어가 모국어가 아닌 사람들에게 일본어를 가르치는 사설 교육기관입니다. 일반적으로 일본어학교에 입학하기 위해서는 「유학」이라는 재류자격을 받아서 일본에 입국한 후, 어학교를 졸업한 후에 대학, 대학원, 전문학교에 진학을 희망하는 외국인들이 일본어를 배우는 곳입니다. 이미 일본 국내에 거주하고 있는 외국인을 받아주는 학교도 있습니다.

※9 : 센다이 일본어강좌

아오바쿠 중앙시민센터와 센다이관광국제협회(SenTIA)가 운영하고 있는 외국인을 위한 일본어강좌로 무료로 배울 수 있습니다. 교사는 NPO 법인 ICAS 국제도시센다이를 지원하는 시민모임의 회원들입니다.

※10 : 모국에서 중학교를 졸업한 학생이 공립고등학교에 출원 시 필요한 서류

중학교에 재학 중인 학생은 학교를 통해서 입학원서 등의 서류를 제출하지만, 중학교에 재학하고 있지 않는 경우는 개별적으로 필요한 서류를 준비해서 제출해야 합니다. 먼저 출원승인을 신청하고 승인을 받으면 출원서류를 제출합니다. 일반적으로 다음과 같은 서류가 필요합니다.

①출원승인 신청 시 필요한 서류

- 미야기현공립고등학교 출원승인원(미야기현교육청 고교교육과 홈페이지에서 다운로드 가능)
- 학교교육의 9 년 과정을 수료했음을 증명하는 서류(최종학력의 학교가 발행) 또는 중학교 졸업정도 인정시험 합격의 인정증명서(문부과학성이 발행)의 사본
- 주민표 사본(재류자격이 기재되어 있는 것)

②출원 시 필요한 서류

- 입학원서 및 사진표(미야기현 수입인지 등을 붙이기)
- 학교교육의 9 년 과정을 수료했음을 증명하는 서류(최종학력의 학교 발행) 또는 중학교졸업정도 인정시험 합격의 인정증명서(문부과학성 발행)의 사본
- 최종학력의 성적증명서 또는 중학교졸업정도 인정시험조사서(문부과학성 발행)
- 출원자 일람표(미야기현교육청 고교교육과 홈페이지에서 다운로드 가능)
- 미야기현공립고등학교 출원승인서(①의 출원승인원에 대한 것으로 고등학교가 송부) 사본
- 수험표 송부용 봉투(長形 3 号, 수험자 성명 및 주소 명기, 간이서류 속달분의 우표 붙이기)
- 결과 통지용 봉투(角形 2 号, 수험자 성명 및 주소 명기, 간이서류 속달분의 우표 붙이기)

※11 : 고등학교 사전 방문

고등학교가 특정 「오픈캠퍼스」날을 정해서 체험입학, 설명회를 개최하는 외에, 희망자에게는 오픈캠퍼스 개최일 외에도 견학을 허가하는 고등학교도 많이 있습니다. 특히 모국에서 중학교를 졸업하고 일본에 와서, 아직 일본 학교생활을 경험해 보지 못한 학생은 적극적으로 진학하고 싶은 학교를 방문해서 학교 분위기를 느껴봄과 동시에 입시에 대해서 상담을 해보는 것도 좋습니다.

※12 : 일본유학시험

「외국인 유학생」으로서 일본에 있는 대학교에 입학할 희망하는 학생들을 대상으로 일본의 대학 등에서 필요로 하는 일본어 능력과 기초 학력을 평가하는 시험입니다. 많은 대학이 이 시험을 이용하고 있는데, 수험과목은 각 대학과 학부에 따라 다릅니다.

※13 : 통신제 고등학교

통신제 고등학교는 통상적으로 등교를 하지 않고 집에서 교과서와 해설집을 보면서 공부를 합니다. 미타조노 고등학교는 미야기현의 유일한 공립통신제고등학교입니다. 레포트 제출, 출석수업(스쿨링), 시험을 통해서 졸업에 필요한 단위를 취득합니다.

※14 : 전문학교

대학은 학문적인 연구를 하거나, 폭 넓은 지식의 습득을 목표로 하지만, 전문학교는 어떤 직업에 필요한 실전적인 기술과 지식을 습득하는 것을 주요 목표로 합니다. 졸업 후에는 학교에서 배운 지식을 바로 살릴 수 있는 직업에 종사할 수 있도록 합니다.

※15 : 일본어가 모어가 아닌 아이와 보호자를 위한 진로 가이드نس

매년 여름, 센다이 시내에서 개최하고 있습니다. 미야기현의 고등학교 입시제도에 대한 설명과 고등학교 선배들의 체험담을 듣거나 학교 선생님께 개별적인 상담을 할 수도 있습니다. 동 진로 가이드نس에서는 일본의 교육제도와 미야기현의 고등학교입시제도에 대해 다국어로 해설이 되어 있는 「진로 가이드북」을 배포하고 있습니다.

※16 : 고등학교졸업정도 인정시험

여러가지 이유로 고등학교를 다니지 못한 사람, 중도에 그만 둔 사람 등을 대상으로 실시하는 시험입니다. 시험에 합격하면 고등학교 졸업자와 동등한 학력이 인정되어 대학, 단기대학, 전문학교 시험에 응시할 수 있습니다.

※17 : 고등학교 2 차 모집

일반 입학시험 합격자 발표후, 모집정원이 미달되었을 때 공립고등학교, 사립고등학교는 2 차 모집을 실시하는 경우가 있습니다.

※18 : AO 입시(Admissions Office 입시)

대학 또는 학부·학과가, 각각의 「Admission Policy(입학 방침)」에 근거하여 학교측이 요구하는 학생을 선발하기 위한 시험제도입니다. 추천입학과 달리 대부분의 경우 고등학교 추천서는 필요가 없습니다. 응시자 자신이 희망하는 대학에 가고 싶은 이유와 고등학교에서의 성과 등을 응시서류 및 면접에서 적극적으로 어필할 필요가 있습니다. 원서지원 조건과 시험내용은 대학·학부·학과에 따라 다릅니다.

※19 : 오픈캠퍼스

대학, 전문학교, 고등학교 등이 자신의 학교를 알리기 위해 주말이나 여름방학 기간중에 학교시설을 개방합니다. 오픈캠퍼스 개최일에는 학교 탐방, 학교생활에 대한 이야기를 들을 수 있습니다.

※20 : MIA 일본어 서포터

미야기현국제화협회(MIA)가 소개를 해주는 학습 서포터로, 일본어 학습을 일대일로 도와주는 볼런티어입니다.

※21 : 비상근 강사의 배치

미야기현 교육위원회는 일본어가 능숙하지 않는 아동·청소년을 지원하기 위해서 학교로부터 신청을 받아 일본어를 지도하는 비상근 강사를 배치하고 있습니다. 채용된 시간수와 기간은 상황별로 다릅니다. 센다이시 교육위원회에서도 같은 제도가 있고 원칙적으로 교원 자격증이 있는 일본인이 배치됩니다.

※22 : MIA 외국국적 어린이 서포터

미야기현국제화협회(Miyagi International Association / MIA)에서는 외국국적의 아동·청소년이 재학하고 있는 초·중학교로부터 의뢰를 받아 학교에 「외국국적 어린이 서포터」를 파견하고 있습니다. 외국국적 어린이 서포터는 아동·청소년의 일본어 학습과 학교공부 지도, 학교측과 아이·보호자와의 통역 등도 지원합니다. 파견 횟수는 시정촌의 파견제도와 합하여 학생 한 명당 최대 40 회입니다. 센다이시 소재 학교의 경우 센다이시 교육위원회가 「지도협력자」를 최대 30 회까지 파견을 하기 때문에 MIA에서는 10 회의 파견을 도와드립니다.

※23 : 사립고등학교의 추천입시

일반입시보다도 앞서 실시하는 전형으로 사립고등학교를 제 1 지망으로 하는 학생들을 위한 시험입니다. 미야기현에 있는 사립고등학교의 추천입시는 모두 같은 날 시행합니다. 지원 조건과 시험과목은 학교에 따라 다르지만 면접과 작문시험을 보는 학교가 많습니다.

※24 : 국제교실

외국국적의 아동·청소년이 다수 재학중인 센다이시 소재의 초·중학교에는 전임 지도교사가 배치되어 있는 학교가 있습니다. 이러한 학교에서는 다문화 학생에게 일본어 지도, 학교공부를 지도하는 국제교실을 개설하여 개별지도도 하기도 합니다. 학생 B.G.군이 다녔던 구니미초등학교는 학구내에 외국인이 많이 살고 있기 때문에 예전부터 국제교실이 항상 개설되어 있습니다.

※25 : 주쿠(학습지도 학원)

초·중·고 학생을 대상으로 학교 수업시간 외에 학교공부를 보충하기 위한 지도를 하거나 진학을 위한 학습지도를 하는 사설교육시설입니다.

※26 : 과거에 실시했었던 추천 입시제도

미야기현의 공립고등학교 입시에는 예전에 조사서 등을 토대로 합격자를 결정하는 추천 입시제도가 있었지만 지금은 폐지되었습니다.

※27 : 센다이시 교육위원회의 지도협력자

센다이시 교육위원회에서는 외국국적의 아동·청소년이 재학하고 있는 센다이시립 초·중학교의 의뢰를 받아 「지도협력자」를 파견하고 있습니다. 지도협력자는 학생의 일본어 지도 등 다문화 배경의 학생이 학교생활을 원활하게 할 수 있도록 도와줍니다.

이외에 미야기현의 시정촌에는 이시노마키시 교육위원회가 지도협력자를 초·중학교에 파견하고 있습니다. 또, 기타 자치제에도 필요에 따라 지원인재를 배치하는 경우가 있습니다.

※28 : 지정교추천

대학이 지정한 고등학교만을 대상으로 한 추천입시로 많은 사립대학교에서 채택하고 있습니다. 성적, 부활동, 과외활동 등의 실적을 토대로 대학에서 제시한 조건에 맞는 학생을 고등학교가 선발합니다. 학교 추천을 받은 학생은 거의 전원이 합격을 합니다.

외국국적 아동·청소년을 지원하고 있는 단체

공익재단법인 미야기현국제화협회(MIA)
<p>현내의 다문화공생 추진을 위해 다양한 사업을 하고 있는 단체입니다. 초·중학교에서 외국국적 아동·청소년의 일본어학습과 교과학습을 지원하는 「외국국적 어린이 서포터」를 파견하는 외에 교재와 지원비용 참고자료의 정비·대출도 하고 있습니다. 외국국적 아동·청소년의 교육과 지원에 관한 상담도 하고 있습니다. 또한 외국인을 대상으로 한 일본어강좌도 운영하고 있으며 일대일로 일본어 학습을 도와주는 볼런티어 소개도 하고 있습니다.</p> <ul style="list-style-type: none"> · 소재지: 仙台市青葉区堤通雨宮町 4-17 宮城県仙台合同庁舎 7階 · TEL: 022-275-3796 · E-mail: mail@mia-miyagi.jp
공익재단법인 센다이관광국제협회(SenTIA)
<p>센다이시의 다문화공생 지역만들기, 외국인 관광객유치 촉진 등을 목적으로 활동하고 있는 단체입니다. 외국에서 온 아이들, 보호자, 외국국적 아이가 다니고 있는 학교를 지원해 주기 위해서 통역과 코디네이터 파견, 교재 등을 소개하는 외에 「여름방학 교실」을 개설하기도 합니다. 또한 일본어 학습을 도와주는 볼런티어를 소개해주는 외에 센다이시와 공동주최로 일본어강좌를 운영하고 있습니다.</p> <ul style="list-style-type: none"> · 소재지: 仙台市青葉区一番町 3-3-20 東日本不動産仙台一番町ビル 6階 · TEL: 022-268-6260 · E-mail: kokuksaika@sentia-sendai.jp
외국인 어린이 지원의 모임
<p>공공시설의 개방장소 등에서 방과 후와 주말에 외국인 어린이에게 일본어와 학교공부를 개별적으로 지도를 해주고 있습니다. 요일과 시간은 상담 후에 결정합니다. 또한 어린이, 보호자, 지원자들과의 모임도 개최하고 있습니다.</p> <ul style="list-style-type: none"> · TEL: 090-2793-8899 · E-mail: jets@sda.att.ne.jp Tadokoro12@yahoo.co.jp
NPO 법인 ICAS(아이카스) 국제도시 센다이를 지원하는 시민모임
<p>아오바쿠 중앙시민센터가 주최하는, 외국에서 온 초·중학생을 위한 일본어강좌 「삿토 일본어 클럽(さっと日本語クラブ)」에서 일본어를 지도하고 있습니다. 또한 성인을 대상으로 한 일본어강좌도 개설하고 있습니다.</p> <ul style="list-style-type: none"> · E-mail: npo.icas@gmail.com <p>◎삿토 일본어 클럽(さっと日本語クラブ)</p> <ul style="list-style-type: none"> · 회장: 青葉区中央市民センター (仙台市青葉区一番町 2-1-4) · 개설시간: 매주 토요일 10:00~12:00 · 문의처: TEL 022-223-2516
중문학교
<p>주로 어린이를 위한 중국어교실로 중국 출신자가 지도를 합니다.</p> <ul style="list-style-type: none"> · 회장: エスポール宮城 (宮城県青年会館) (仙台市宮城区幸町 4-5-1) · 개설시간: 매주 일요일 10:00~12:00 · 문의처: 022-293-4631
한글학교 미야기
<p>재일본대한민국민단 미야기현지방본부(민단미야기)가 운영하는 한국에 뿌리를 두고 있는 어린이가 한국어·한국문화를 배우는 교실입니다.</p> <ul style="list-style-type: none"> · 회장: 韓国会館 (仙台市青葉区本町 1-5-34) · 개설시간: 토요일 13:00~17:00 (연간 25 회) · 문의처: 022-263-6961(월~금)

「外国籍児童生徒サポート事例集～多文化な子どもたちの未来をひらくために～」

【編集・発行】

公益財団法人宮城県国際化協会(MIA)
〒981-0914 仙台市青葉区堤通雨宮町 4-17
宮城県仙台合同庁舎 7 階
TEL: 022-275-3796 FAX: 022-272-5063
e-mail: mail@mia-miyagi.jp
<http://mia-miyagi.jp>

【協力】

外国人の子ども・サポートの会
<https://kodomosupport.jimdo.com>

2019 年 3 月発行

